

國學院大學学術情報リポジトリ

1893年補欠選挙での社会主義派議員としての初当選から1898年総選挙での落選までの時期のジャン・ジョレース議員の政治活動 1893年-1898年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 謙一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001657

1893年補欠選挙での社会主義派議員としての初当選から 1898年総選挙での落選までの時期のジャン・ジョレース 議員の政治活動 1893年 - 1898年

横 山 謙 一

はじめに

かつて穏健共和派の代議院議員であったジョレースは1893年1月8日 - 22日の代議院議員補欠選挙によって社会主義派の議員になって以降、1898年に落選して議員の職を失うまでの4年間、独立社会主義派の代議院議員としての最初の議員時代を経験した。

本稿の対象となるこの4年間は、第1にジョレースにとって社会主義派議員としての「見習い期間」であり、地元カルモー市の労働者に根を下ろし深く結びつくようになる期間であった。1893年1月1月の代議院議員補欠選挙で当選するまでの時期のジョレースは1892年カルモー炭鉱のストライキで勝利した炭鉱労働者の運動を支持して世論を動員するために多くの記事を書いたが、直接に労働組合運動に深くかわかりストライキを指導したわけではなく、ストライキに勝利して経営者を議員辞任に追い込んだ鉱山労働者に選ばれた候補者であり、他の候補予定者が辞退したことによって彼に舞い込んだ立候補の機会であった。

当選後間もないジョレースは、最初にストライキを指導したカルモー鉱山労働組合書記長でカルモーCarmaux の社会主義運動の指導者であったジャン・バティスト・カルヴィニャック Jean-Baptiste CALVIGNAC との結びつきを深めた。詳しくは本文の第1章でのべるが、カルヴィニャックが1893年総選挙で立候補した彼の選挙運動を支援し、カルモー市長当選後^{☒☒☒}に解職され被選挙権を剥奪されたカルヴィニャックの裁判を援助する過程で、彼との協力関係を強めていった。またカルヴィニャックとともに議

員職を無効にされて被選挙権を奪われた硝子労働組合書記長ジャン・ボード Jean BAUDOT に対しても裁判を支援して結びつきが培われていった。しかしカルモー市サント・クロティルド硝子工場 verrerie Sainte-Clotilde の労働者全体とジョレースとの深い連帯が生まれるのは、運命的な1895年のストライキ事件以降のことである。

第2にジョレースのこの任期中の最大のタルン県での事件は、上記のカルモー市サント・クロティルド硝子工場労働者の運命的なストライキと労働者管理の硝子工場「アルビ労働者硝子工場」の設立であった。1895年の硝子工場のストライキでのストライキの敗北の結果生活の手段を失った硝子労働組合の労働者が、全国の労働者からの醸金と篤志の出資者によって「アルビ労働者硝子工場」を設立する過程については第2章で詳述する。

第3にこの時期のジョレースは自分の選挙区であるカルモーの労働者のストライキばかりではなく、ロワール Loire 県リヴ・ドゥ・ジエル Rive-de-Gier の金属労働者と硝子製造労働者のストライキやソーヌ・エ・ロワール Saône-et-Loire 県のモンソー・レ・ミヌ Montceau-les-Mines、隣県エロー県のグレースサック Graissessac、カンタル県のシャンパニャック Champagnac、ガール県グランコンブ Grand'Combe などの炭鉱労働者のストライキ事件を支援し、実際に現地を訪れてストライキの現場を報告し支援する記事を書き、代議院でのこれらの労働争議について政府の責任を追及する過程で、これらの労働争議の根本的解決の方法として労働仲裁 Arbitrage や強制仲裁 Arbitrage obligatoire 法、の制定が焦眉の課題であることを認識していく。

第4にこの時期の冒頭にはジョレースは全国的な問題となっていたパナマ運河事件の追究に取り組んだ。ブーランジェ運動が潰えて以来、パナマ運河事件を乗り切って政権の中枢に復帰した穏健共和派＝オポルテュニストが、元カトリック・君主政派が穏健共和政に「加担」した「[加担派]」の支持で保守化し、た「新精神」エスプリ・ヌーヴォー^{☒☒}スピュレル SPULLER^{☒☒}にもとづくプロGRESISTと次第に呼ばれるようになった穏

健共和派による政治は、アナーキスト☒無政府主義者☒のテロリズムを口実に「極悪諸法 Lois scélérates」を制定して出版の自由を抑圧する。ジョーレスは「極悪諸法」が社会主義者の新聞に適用された事件である「シャンバール ☒☒☒☒☒☒☒ 紙掲載の記事「カジミール・ペリエ氏を倒せ」でジェロー・リシャルが刑事訴追された事件で被告側の立場から弁論をおこなうなど、プロGRESIST政治との対決の時代であった。

やがてジョーレスはアルフレッド・ドレーフュスの無実を確信して、ドレーフュス再審を強硬に退けるメリーヌ政権の政治と立ち向かうことになるのは、1898年総選挙の直前のことである。

この議員任期を終えて1898年総選挙でジョレースが落選した後、1902年総選挙で議員に復帰するまでの間の4年の間、彼はジャーナリストと歴史学研究と歴史書の執筆に心血を注いだ。その成果は世紀の「罪事件」として世界中の注目が集中したドレーフス事件について「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に「証拠」と題する記事を連載して、当時の陸軍大臣ゴッドフロワ・カヴェイニャックがドレーフス有罪の決定的証拠として代議院に提出した証拠の一つが偽造文書「いわゆる「アンリ偽書」」であることを暴露しての事件の大逆転をもたらし、証拠を偽造したアンリ情報部部長は偽造を自白した後に独房で自殺した。ジョレースの歴史研究と歴史書の執筆は彼が担当したフランス革命史についての四巻の著作「第Ⅰ巻『憲法制定議会』、第Ⅱ巻『立法議会』、第Ⅲ巻『国民公会Ⅰ』、・第Ⅳ巻『国民公会Ⅱ』」を含む社会主義者による歴史学叢書『社会主義者のフランス現代史』全13巻の刊行を果たした。ジョレース自身が執筆したフランス革命史についての4巻は後のアナール学派の歴史学に途を開くフランス歴史学の金字塔的な業績となる。

彼が議員職を失っていたこの4年間には統一したフランス社会党を結成するための試みが1899年の「ジャッピー大会」第1回フランス社会主義諸組織全体大会を皮切りに1900年に「ヴァグラム大会」、1901年に「リヨン大会」

と三度統一が試みられたが、ヴァルデク - ルソー内閣への「ミルラン入閣問題」をめぐって入閣支持派と反対派が分裂してそれぞれが社会党☒ジョレースを中心とする「右派フランス社会党 Parti socialiste français」とゲード派・ヴァイアン派の「左派フランス社会党 Parti socialiste de France」☒を結成して、社会党は二分状態を時代が1905年のパリ・グロブ大会での統一社会党☒正式名「社会党・労働者インターナショナル・フランス支部 Parti socialiste, Section française de l'Internationale ouvrière」☒結成まで続いた。

統一社会党結成後のジョレースはフランス社会主義運動の歴史的傾向を受け継いだ社会党が議員を党の執行機関から第1次世界大戦直前まで排除したが、にもかかわらず彼は社会党を代表する指導者であり続け、ドレーフスの最終的無罪判決や政教分離法の立法、労働者農民退職年金制度の実現に努力し、暗殺直前の数年は第2インターナショナルの代表的指導者として迫りくる世界大戦の暗雲に立ち向かい、1913年の「3年兵役法」反対運動に死力を尽くし、1914年の独仏間の戦争がはじまる3日前に狂信的ナショナリストの凶弾に仆れた。

本論文の対象は1893年1月の補欠選挙と同年8月の総選挙での当選から1898年の総選挙で落選するまでの4年間の議員活動を主とした期間に限定されるが、それ以降1914年7月31日に暗殺されるまでのさらなる16年間は視座に入れなければ、この4年間のジョレースの活動の意義を総体として把握することは困難である。この4年間は発展の過程にあったジョレースの一時代であり、やがて彼の本領が発揮されるまでの萌芽期であり、「見習い期間」であったからだ。

1893年1月8日 - 15日の補欠選挙でジャン・ジョレースは社会主義者の代議士としてアルビ第2選挙区から代議院議員に当選した。この時は社会主義者の議員としての初当選であっても、すでに彼は穏健共和派の代議院議員として1885年10月の総選挙でタルン県全県選挙区から当選している。1889年総選挙でカストル第1選挙区から共和派の代議士として再選を果た

せずに、トゥルーズ大学哲学講師とトゥルーズ市議会議員・助役の4年間の時代の後に、故郷のタルン県カルモー鉱山労働者のストライキの勝利によってカルモー鉱山副社長のジェローム・リュドヴィク・ドゥ・ソラージュ伯爵 Marquis de Jérôme Ludovic de SOLAGES が議員を辞職した後の補欠選挙で、カルモー鉱山労働者の支持を受けて社会主義派議員として初当選を果たした。補欠選挙から間もない約7か月後の同年8月20日の総選挙第1回投票でジョレースは1月の補欠選挙よりも得票を578票増やして5,663票 得票率59%を得て当選した。4つの農村地域小郡 canton のうちパンプロス Pampelonne とヴァランス・ダルビジオア Valence d'Albigeois の2小郡で第1位の得票を得た。

第1章 1893年 - 1895年のタルン県カルモー市でのジョレースの政治活動

この章では1895年に起きたタルン県カルモーの労働組合運動とジョレースとの結びつきを決定的なものにするカルモー市サント・クロティルド硝子工場労働者のストライキにいたる重要な時期である。この2年間で培われたタルン県の労働組合運動と労働者たちとの結びつきを抜きにしてはこのストライキ事件を境目とした彼のタルン県の労働者と民衆の間での信頼と威信の確立は考えられないであろう。

第1節 タルン県の政治状況とジョレースの議員活動

1893年1月の補欠選挙から1893年8月 - 9月の総選挙までの第V議会任期 1889年11月12日 - 1893年10月14日の最後の約9か月の短い残余期間と1893年の総選挙から1898年5月の総選挙までの4年間の第VI期議会任期 1893年10月15日 - 1898年5月31日の時代のジョレースの議員としての政治活動は、彼の故郷であったタルン県と彼の選挙区であるアルビ第2選挙

区、その中でも彼の選挙基盤であるカルモーの鉱山労働者と硝子労働者が住むカルモー市にかなり集中している。彼にとって第Ⅵ議会任期1893年 - 1898年のうちの1893年と1894年、そして8月1日に硝子工場労働者のストライキが起きるまでの1895年の7か月間は、彼の選挙区であるアルビ第2選挙区だけではなく、タルン県全体に社会主義勢力の影響力を広げるために、特にこの県での代議院議員選挙ばかりでなく県議会議員選挙と市町村議会選挙での選挙活動に力を注いだ時期であった。

特に1893年は彼の社会主義派議員としての初当選の年であり、ジョレース自身が社会主義派議員としての再選を果たした1893年8月 - 9月総選挙ではこの県のカストル第1選挙区に立候補していた社会主義派候補者レオン・カラゲル Léon CARAGUEL のへの応援演説とマザメ市を中心としたカストル第2選挙区の社会主義派候補者でカルモー鉱山の労働組合運動の指導者であったジャン・バッティスト・カルヴィニャックのためにマザメ市で応援演説をおこなっている。この時の総選挙ではジョレースもアルビ第Ⅱ選挙区から選挙に立候補していたのであるから自分の当選ばかりではなく、タルン県全体での社会主義者の候補を当選させ、社会主義の影響力を全県に広げることにかかなりの熱意を抱いていたことがうかがわれる。結果的には彼は同年1月の補欠選挙で獲得した票を上積みして当選したのであるが、自分の選挙区での選挙運動を中断しても他候補の応援を行って、彼が応援した2候補は保守地盤の強固なカストル選挙区で当選には漕ぎ着けられなかったが、かなりの善戦を果たした。

またこの時期にはタルン県の保守派の中心人物であり社会主義運動と彼が支持した労働組合運動への敵対者であったカルモー鉱山会社の経営者リュドヴィック・ドゥ・ソラージュ侯爵や彼の義父ルネ・レイユ男爵 Baron René REILLE の息子には長男のカストル第1選挙区選出の議員アンドレ・レイユ André REILLE と兄アンドレの死後に議席を受け継いだザヴィエル Xavier、父の死後に議席を継いだアメデ Amédée がいる。そしてカルモーに所在する硝子工場の経営者ウジェーヌ・ルセギエ

Eugène RESÉGUIER の労働運動への敵対と弾圧とジョレースは宿命的な対決を行うことになる。その頂点を極めるのは1895年の硝子工場のストライキであり、その帰結は「アルビ労働者硝子工場」の設立であった。

県のほとんどを農村部が占めていたタルン県は大土地所有者にして大企業経営者である保守派のこの時代の保守派 = 右翼は君主政支持派——王政支持派または帝政支持派——のカトリック派か君主政支持から保守的共和政支持に鞍替えした「ラリエ加担派」であったが強い地盤を持っていた一方で、これに対抗して小自作農民や小商工業者・商店主など、いわゆるガンベッタが言う「新しい諸階層 nouvelles couches sociales」1874年6月1日のオセール Auxerre での演説を支持基盤とした共和派の勢力も強固で、共和派の中ではこの時期特に急進派が勢力を拡大しつつあった。

1885年総選挙で共和派の候補者で前議員であったジョレースは1889年総選挙でカストル第1選挙区において保守派君主政支持派候補ジャン・ピエール・アブリアル Jean-Pierre ABRIAL に敗れたが、この1889年総選挙の結果タルン県で当選した6人の議員中保守派 = 君主政主義者がリュドヴィック・ドゥ・ソラージュ侯爵、レイユ男爵、アブリアルなど4人であったのに対し、共和派は第3次リボ内閣の公共大臣になるリュドヴィック・デュピュイ - デュタン Ludovic DUPUY-DUTEMPS ガイヤック選挙区と1885年総選挙でジョレースと同じ共和派の名簿で選ばれたルイ・カバリエ Louis CAVALIÉ の2人でいずれも元来オポルチュニストと呼ばれていた、1890年代になるとプログレティストも称されることが多かった穏健共和派であった。この県で1885年総選挙ではレイユ男爵しか当選させることができなかった保守派が、1889年総選挙ではタルン県定数6名中4名を当選させて共和派を圧倒した。

これに対して1893年総選挙では保守派君主政支持者か「加担派ラリエ」のアブリアルカストル第1選挙区とルネ・レイユカストル第2選挙区のほかは社会主義派からジョレースが、共和派からは穏健共和派のデュピュイ - デュタンとオーギュスト・ドゥ・ベルヌ - ラガルド

Auguste de BERNE-LAGARDE^{図10}アルビ第1選挙区^{図11}が、急進派から1885年総選挙でジョレースとともに共和派の名簿から当選したガブリエル・コンペイレ Gabriel COMPAYRÉ の弟 エミール・コンペイレ Émile COMPAYRÉ^{図12}ガイヤック選挙区^{図13}が当選して共和派が多数を占めた。しかし教皇レオン13世の「ラリマン^{図14}加担^{図15} 政策のもとで、「ラリエ^{図16}加担^{図17} 派^{図18} が穏健共和派の政府の支持に転じて以降、保守派と穏健共和派の境界線は不明確なものとなっていく。この県では未だジョレースが属する社会主義派はカルモーを中心とした社会主義運動と労働組合運動に支えられて産声を上げたばかりで、2人目の社会主義者の議員ジャン・サバン Jean SABIN が当選するのは1910年総選挙の時である。急進派は大勝利を収めた1902年の総選挙で半数の3名を占めている。それでも農業が支配的であったこのタルン県の保守派の勢力は、侮れない強力な支持基盤を有していた。

1893年の総選挙でジョレースはこの県で社会主義派の支持を広げるための運動は自分の肩にかかっていると考えたためか、上記のように自分の運動ばかりか他選挙区の応援にも駆けつけている。ジョレースが応援した仕立て職人のカラゲルは第1回投票で4,841票を獲得して第2位で決選投票にのぞみ、7,289票を集めて善戦したが、8,727票を獲得したアブリアルに敗北した。^{図19}ジョレースはカラゲル候補を支持するカストル市での応援演説では当時の政権与党である穏健共和派^{図20}オボルチュニスト＝プログレスリスト^{図21}について、共和政を君主政を支持するカトリック教権的反動から守ったが、憲法や税制、社会立法などの改良に着手せずに先送りして、あげくはパナマ汚職事件で中心的な横領・背任の首謀者を処罰できなかったと批判し、新しい人民によってたつ社会主義者を政権与党に選ぶことを求めた。^{図22}

カルモー鉱山の労働組合の指導者カルヴィニャックはデレイナージュ Délainage^{図23}羊皮剪毛業^{図24}で知られるマザメがある、レイユ男爵の強固な選挙地盤カストル第2選挙区から立候補したが、ルネ・レイユ男爵の前に^{図25}9,389票対3,136票で敗れている。ジョレースはマザメ市で行ったカルヴィ

ニャックを応援する演説の結びの部分で当時の与党オポルチュニスト¹⁴と穏健共和派¹⁵と王政主義者は手を組もうとしていると警告して「一方の王政主義者は共和政体を受け入れようとし、他方で共和主義者は王政主義者の政策を受け入れようとしています。したがって和解することが予定されているのです。そして労働者が一大勢力となると、両者は同時に恐れを抱いて今こうして両者は社会主義運動に敵対して協力しています」と述べている。この時代の大きな争点は、教皇レオ13世1893年に打ち出した「ラリマン¹⁶加担¹⁷」政策によって、保守的穏健共和主義者と共和政に「加担」した君主政主義者の協力がどれほどの成果を生むかの問題であった。労働者階級と社会主義が政治的影響力を急速に拡大していったこの時代に、資本家や地主階級からなる当時の支配層が共和政支持と君主政支持に分裂している余地がなくなりつつあったからである。タルン県でもアルビ第2選挙区でジョレースが当選し、保守勢力の基盤であったカストルの2つの選挙区でもジョレースが応援する社会主義者のカラゲルやカルヴィニャックが次第に得票数を増加させて保守派の候補に迫りつつあったことは上記の通りである。

ジョレースは彼が1887年以来定期的に寄稿している急進派の新聞「デペッシュ」紙の編集部にも、8月16日にアルビ第1区で社会主義派の候補が2名立候補して分裂して保守派プロGRESISTの候補ベルヌ-ラガルド¹⁵BERNE-LAGARDEを有利にしていることを懸念する書簡を書いて翌日同紙に掲載されたが、8月20日の決選投票の結果はジョレースが不安視したとおりに社会主義派のアンドリュ-ANDRIEU¹⁶が4,618票¹⁶40.4%¹⁷ユグナン HUGUENINが1,003票¹⁸8.8%¹⁹を得票したのに対して、ベルヌ-ラガルドが5,813票²⁰50.8%²¹で当選した。しかしアンドリュ-はやがて急進社会党の議員になる候補で、一方ユグナンは労働組合運動の指導者で紛れもない社会主義者であった。当時は急進社会主義派と社会主義派の境界線がそれほど明確ではなかったのである。

ところでタルン県社会主義者の新聞「ラ・ヴォワ・デ・トラヴァユー

ル ~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~労働者の声~~XXXX~~ 紙1893年8月17日号に掲載されたジョレース自身の記事「1893年8月20日代議院議員総選挙の政見公約~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~^{図15}」の冒頭にはパナマ・スキャンダルに対する政府と司法当局の弱腰を非難する決議に賛成することが公約として掲げられている。第2に掲げられた実績は自作農 cultivateurs の利害を重視し、「土地税本税の廃止 suppression du principal de l'impôt foncier」を7月8日と10日に代議院で要求したと書いている。第3に義務兵役年限を3年から2年に削減することを公約として掲げている。第4に小麦の価格について1ヘクトリットル当たり20フランが労働者と農民の両者の利益が合致する価格であり、この価格になるように関税を引き下げ、唯一政府のみが外国からの小麦を買い付ければ投機や買い占めが行われなとしている。最後に社会主義者の農業改革の綱領として累進所得税を財源とする農民組合と農業労働裁判所の増強と小土地所有農民と農業労働者からなる農村の勤労者の年金、農村自治体の高額農業機械購入と原価での耕作者への貸与とフランス銀行による国民への定額利子での貸付を公約として発表している。この時代のジョレースがいかに農民問題に熱心に取り組んだかが理解できる。彼の選挙区を見ても、この選挙区を構成する5つの小郡~~XXXX~~カントン canton~~XXXX~~のうち、1889年7月にモネステイエス Monestiès 小郡から分離して作られた鉾山労働者と硝子壺製造労働者などの工業労働者が集中して居住していたカルモー小郡以外のモネステイエス、パンプロヌ、ヴァルドゥリ Valderies、ヴァランス・ダルビジョアの4つの小郡は圧倒的に農業人口が多い農村地域であった事実からして、農民問題は避けて通ることのできない必須の課題であった。

この1893年と1894年の時期には彼は地元の社会主義運動の指導者たちに書き送った書簡が資料として残されていて、特にカルモー市長でカルモー鉾山労働組合の指導者であるカルヴィニャックへの書簡の数が多い。カルヴィニャックは1892年5月にカルモー市長に選ばれたが停職処分を受けて辞職したのちに補欠選挙に立候補したが、当選無効の宣告を言い渡された。

これらの書簡からタルン県の社会主義活動家と選挙運動や情宣運動で連絡を取り合っていたことがわかる。

この時期にジョレースが「デベッシュ」紙に執筆した注目すべき記事は、1894年4月10日の同紙に掲載された「元老院議員と県知事 Sénateur et préfet」と題された記事である。この記事でジョレースはタルン県議会の開会にあったの元老院議員でタルン県県会議長のエドゥアール・バルベ Édouard BARBEY と新任県知事 〓 県知事は当時内務大臣によって任命された 〓 のドゥー DOUX 〓 任期1894年1月 - 1895年12月 〓 の演説について論評している。バルベ元老院議員は労働者の支持票で県会議員に当選しているのだが、この時の演説で社会主義に対する攻撃を行って元君主政 〓 帝政 〓 支持者で「加担派 〓 ラリエ 〓 に鞍替えした保守派のレイユ男爵や彼の女婿ドゥ・ソラージュ侯爵から喝采を受けたという。ジョレースはバルベの社会主義への批判に、大企業こそが小自作農民は重税 〓 大投機家の穀物買い占めによって脅かしていると反論している。社会改良についても社会主義者は混乱を起こして妨害をはかっているとバルベが主張するのに対し、ジョレースは事実が全く逆で、8時間労働日をはじめ多くの労働者のための改良を主張していると反論する。

新任の県知事もバルベと同じく社会主義を攻撃したが、真の共和政が実現する日が来ると主張する古い共和主義者であった。しかしタルン県の行政では政府に妥協して急進派のリセ 〓 国立高等学校 〓 教師を配置転換させたり、社会主義者の教師を解任したり、社会主義者のカルモー市長カルヴィニャックを停職処分と解任をおこなった。この時期のタルン県知事府は短いレオン・ブルジョア政権の時期を除いてカトリック教権派と結びついたプロGRESIST政権の支配下に置かれ、県議会でも社会主義派ばかりか急進派でさえも地歩を占めることが出来ないでいた。ジョレースのこの記事は当時のタルン県の政治勢力図を伝えてくれる。

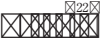
第2節 1893年・1894年の代議院でのジョレースの活動

1893年から1894年の期間のジョレースの代議院での演説は、この2年間の代議院での演説集『議会演説集。エドモン・クラリス編纂・校訂  によって刊行されている。この演説集の前半部分にはジョレースがまだ穩健共和派の議員であった1885年 - 1889年の第 IV 議会任期 IV^e législature の18回の議会演説と、後半部分には社会主義派議員になってからの1893年と1894年の28回¹⁹の演説が収録されている。後半部分の28回おこなわれたジョレースの議会演説に限定してみても、そのテーマは地元のタルン県の問題を超えて、県外の労働組合運動や全国的な政治問題が多く扱われている。他の諸県での労働組合運動への支援の問題は本論文の第3章で、全国的政治問題に対するジョレースの取り組みは第4章で考察する。

この1883年 - 1884年の時期の代議院での演説には農民と農業労働者についての、特に彼が選挙時の公約に掲げた土地税の軽減と廃止をもとめる発言が多かったことに注目すべきである。カルモー市の労働者を支持基盤としながらも、ジョレースはいかに農民の利益増進のために力を傾注することが必要であったかがこの事実からも明らかである。しかし農民票の獲得のために農民層の利益を擁護したとみるべきではなく、農民中の小作農民、農業労働者に加えて零細な小土地所有自作農は社会主義が擁護すべき社会階層であるとジョレースたち独立社会主義者は考えていた。これに対してマルクス主義ゲード派は、原則的に農民所有地はすべて社会化されるべき対象であると考えていた。

1892年にカルモー市長に当選したカヴェイニャックは1894年3月に市長職を解任され、後任に社会主義派市議会議員のマザンス MAZENS がカルヴィニャックの市民権停止期間が過ぎた1年後に市長職を明け渡すとする約束で市長になったが、期日が来た1895年3月19日に確約を守らずにマザンスが辞職しなかったため、マザンスを当時県会議員になっていたカヴェイニャックと硝子労働組合書記長で小郡  カントン  議員のボードが議会

で攻撃したとして検察当局は2人のカルモアの労働運動指導者を起訴した。同年5月18日にはアルビ軽罪裁判所で5年間の市民権停止判決が言い渡され、6月28日にトゥルーズの控訴審で刑が確定した。この裁判に対してジョレースは友人の社会主義派弁護士ヴィヴィアニやミルランの支援を受けて、2人のカルモア労働組合運動と社会主義運動の指導者を支援した。そしてジョレースは「デベッシュ」紙と「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に一連の記事を執筆して、傾向的で不公正な裁判を批判する一連の記事を書いている。1895年5月13日に「ラ・デベッシュ」紙に掲載された「タルン県において  ではデュピュイ内閣のオポルチュニズム 穏健共和政に加担した元君主政支持者のレイユ男爵の一族に支えられた当時のタルン県知事ドゥーが一連の反社会主義的政策の首謀者であり、1884年3月にカルモア市長を解任されたカヴェイニャックが復帰するまでの臨時代行であったジャン・フランソワ・マジヤンス  記事では実名を出さず、「裏切りもの」と書いている  が1895年3月15日に市長に居座るという裏切り行為をさせ、市議会でカルヴィニャックとボードが彼を非難すると公務執行妨害で前者の県議会議員当選と後者の郡議会議員の当選を無効とされたうえに、被選挙権を剥奪される結果を導いたと指摘した。同年5月22日の同紙掲載記事「公判にて  ²⁰¹ ではジョレースは同年4月22日にカヴェイニャックがカルモア市議会議員補欠選挙で当選して5月6日に市長に選出されると県知事はこの当選を無効にしたばかりかマジヤンス  この記事では実名を出している  の告発を受けて彼の被選挙権を奪ったが、市議会でマジヤンスを侮辱する言葉を聞いたというのはマジヤンス本人と警視しかいないのに、カヴェイニャックを解職したタルン県知事やカヴェイニャックとボードの被選挙権  市民権  を停止させる判決を導いた検察官や裁判官の公正でない立場を批判した。続けて1895年6月2日には「ラ・プティット・レピュブリーク」紙にジョレースは「ある裁判  と題する記事を書いて、アルビ軽罪裁判所の裁判官が同様の事例では罰金刑を科して選挙権剥奪をもたらす禁錮刑は言い渡してこなかったのに、今

回はカヴェイニャックとボードが「扇動者 agitateurs」であるから禁錮刑を宣告したと公然と認めたことを問題にしている。さらに1895年6月25日には「返答  ^②」と題するトゥルーズ控訴院検事がジョレースの「デペッシュ」紙に書いた記事への論評をレイユ男爵の新聞「ル・テレグラム  紙に発表した。この内容に対する返答を書いている。この記事の中で法院検事はジョレースが法に対する反乱を市民に呼びかけているとしている。ジョレースは初審のアルビ軽罪裁判所の判決が控訴院検事に重荷を負わせたが、より政治化させた責任は法院検事にあると問題視する。そしてこの裁判がレイユ男爵とドゥ・ソラージュ侯爵の1892年のカルモー鉱山ストライキへの報復であることを指摘している。そしてタルン県知事ドゥーが彼らの代理人であることも付け加えられている。

この裁判の結末は最終的にカルヴィニャックの側の勝利に終わる。トゥルーズ控訴院での控訴審でも選挙権剥奪の判決が出されたが、マジヤンス市長は市民と市議会の支持を得られずに辞職し、1986年5月に補欠選挙が行われ市議会議員に当選したカルヴィニャックは同月17日に市長に就任する。しかし再度県知事は市議会議員選挙を無効し、カヴェイニャックが市長に復帰するのは1900年12月16日のことである。この時から彼は1929年12月31日まで市長職を保持する。

第2章 1895年のカルモー硝子壺製造労働者のストライキの敗北と「労働者硝子工場」の設立

1895年8月に起きたカルモー市サン・クロティルド硝子工場の労働者のストライキの結果は、当時の経営側と労働者側の力量の差をまざまざと見せつけた。経営側のロックアウト措置に対して労働者側が対抗する手段はひとつしかなかった。解雇されたストライキに参加した労働者は、路頭に放り出される以外には自らが働く労働者の硝子工場を設立するほかにすべ

はなかった。自ら選んだ労働者工場の設立以外の救済手段が存在しなかったからであった。

第1節 1895年のカルモー硝子壺製造労働者のストライキの敗北

1895年にはカルモーのサント - クロティルド硝子工場でストライキが起きる。このストライキは全国的な反響を呼び起こす。このストライキについては拙著『ジャン・ジョレースとフランス社会主義運動・ジャン・ジョレースの青年時代』でその背景とストライキの推移の概略を示したが、ここでは議会活動を通してジョレースが行ったこのストライキへの支援に中心をすえて考察する。サント - クロティルド硝子労働組合書記長ジャン・ボードと隣県のエロー県ブスケ - ドルブ Bousquet-d'Orb 硝子労働組合書記長のペルティエ PELLETIER が1895年7月21日 - 27日にマルセイユで開催された全国硝子労働組合連合 Fédération nationale des travailleurs du verre の大会に参加して職場に戻ると、これまで認められてきた組合大会参加を理由とした欠勤を理由に2人の組合書記長は突如解雇を通告された。この解雇の背景にはタルン県で急速に勢力を伸張させてきた社会主義運動と労働組合運動を壊滅に追いやろうとしたウジェーヌ・ルセギエの政治的意図が働いていたとジョレースは憶測した。

7月31日の組合代表と会社の交渉を決裂し、翌日サント - クロティルド工場の労働者が、翌々日に同じルセギエが経営するブスケ - ドルブ工場の労働者がストライキに突入した。8月1日のジョレースの仲介も拒否された翌日に内務大臣のジョルジュ・レーグ Georges LEYGUES に「ボードの容赦のない解雇は硝子労働者のストライキを呼び起こしました。労働者たちは彼らの仲間が以前の大会に出たときと同じ規則の条件で硝子労働者大会のために欠勤したと主張し、懸命に証明しようとしています」という文面から始まる電報²³を打った。この電報で労働者が求めている仲裁を受け入れるよう会社側に働きかけることを大臣に求めた。ジョレースは8月7日には

今度はリボ首相に電報²⁴を送り、前日午前11時にストライキを解除して職場復帰して会社に通告し、ルセギエもこれを受け入れたので、すぐにジョレースはブスケ-ドルプ工場の労働者のもとに出向いてストライキを中止するように説得して、同日夕刻に仕事を再開することを全員一致で決定した。しかし、夕刻になって会社側が工場をしばらくは再開しないと、すなわちストライキ参加者全員を解雇する旨を電文で通告してきたため和解は不可能となって、労働者の怒りが極限に達して流血回避のために仲裁に入ることを直接リボ首相に求めた。

ストライキを行った労働者への攻撃は本来は自分に向けられたものであることをジョレースは「ル・タン²⁵」紙とのインタビューで認めており、ルセギエの新聞「ル・テレグラム」が硝子労働者と自分に対してストライキ投票結果を捏造しているという中傷を行っていると言簡で「デペッシュ」紙に書き送っている。

そしてジョレースはナルボンヌ、トゥルーズ、パリ、リヨンなどの諸都市で遊説をおこなって、解雇された硝子労働者への支援を訴え募金募った。8月25日にナルボンヌでは市長でゲード派の代議士エルネスト・フェルール Ernest FERROUL と急進派の代議士ティエリ・カズの歓迎を受け、「真実はカルモーに資本を困らせる硝子労働者の組合があるからです。この組合を解体する必要があるのです。あらゆる手段で解体したいとのぞんでいるのです²⁶」と演説した。パリでは1万人の聴衆をパリ・ティヴォリ・ヴォクソール Tivoli-Vauxhall de Paris 会館²⁷パリ10区²⁸に集めて演説を行い、ルセギエが自分の野心を満たすため労働者を動員してトゥルーズ市議会選挙で共和派の候補として当選したり、競争相手の企業を脅かすために労働者がゼネラル・ストライキを宣伝することを求めたりしたことを暴露している²⁷。この集会にはヴァイアン、サンバ、ヴィヴィアニなどの社会主義派の議員も参加している。9月14日のトゥルーズでの集会ではストライキの政治的社会的帰結について演説して、経営者の権利と労働者の権利について論じ、結末では憎悪の社会進歩に果たす役割から論じ始めて、心の平穏

について論及するに至っており、今回の演説の高度の哲学的省察が我々の注目を引く。

第2節 代議院での硝子工場労働者ストライキについての政府責任の追及

代議院でジョレースがカルモー硝子工場ストライキについて論及して政府に問い質した主要な質問は1895年10月24日 - 25日と1896年6月8日と同年11月5日の3回である。第1回目の1895年10月24日 - 25日の演説は2日間に及び、初日には15分の休憩も認められるほどに極めて長大なものあった。この演説の冒頭でストライキの深い諸原因を探ることに精力を集中した。冒頭でルセギエの経営手法について言及し、一般に言われているように彼は「博愛的でリベラルな経営者」ではなく、ルセギエは新聞が伝えるような労働者の「退職年金基金」を創設してはおらず、割高にされた飲料を売る経営者の購買部による共済基金があるだけであり、それも労働者の購買に比例して利益は共済基金に繰り入れられると指摘する。ルセギエの工場はフランスの大多数の硝子工場よりも高い給与が支払われているために各地の硝子工場労働者を集めることが出来、鉄道会社との政治的結びつきから輸送費が割安であるうえにワイン生産地ボルドーの近隣地でありメリットを受けているが、最近では給与が引き下げられていると指摘する。しかしサント・クロティルド硝子工場のボトルネック部分の製造過程は特殊で、藁の煙が悪影響を与えて生命を危険にさらすために多くの労働者は工場を離れていったという。また1891年に労働者は販売不能であるのに売却されていた欠陥ガラス壺の破棄を求め合意がなされた。しかしルセギエは秘密裏に一部の労働者に欠陥ガラス壺を破棄しない代わりに割り増しを支払うと約束したが、労働者間に疑惑が生まれてルセギエと労働組合との対立が生じたとジョレースは言う。ドゥ・ソラージュ侯爵もおこなった選挙への労働者の協力を得ることが出来なかったルセギエは、一転して労働組合の存在を否定するに至り、ドゥ・ソラージュはルセギエの会社の取締役役になり、

デュピュイ内閣は警察を派遣してストライキに耐えられる在庫を調べさせたと指摘すると、デュピュイ首相は狼狽した。ジョレースは続けてカストルの補欠選挙では君主政支持者のアンドレ・レイユを支持して当選させるなど、政府は穏健共和派の候補者さえ支持せずに君主政派の候補者を支持していると糾弾する。1891年にルセギエは欠陥ガラス壘について譲歩したが、これからは欠陥ガラス壘に半額支払って売りたい価格で売るという条件を労働者が受け入れなかったので、工場を閉鎖すると労働者を脅した。労働者の譲歩を得ると次に2人の労働組合の指導者ボードとペルティエを解雇したが、7月29日にボードは郡議会議員にカルヴィニャックは県議会議員に当選した。当局に箴絡された前述のマザンスは市議会を開くとボードとカルヴィニャックがマザンスを攻撃する暴言を言ったとして有罪が言い渡され、被選挙権を奪われた。ジョレースによればボードはカルヴィニャックの罪を庇おうとして暴言を言ったのは自分だと証言したが、証人は2人からその言葉が発せられなかったと証言した。ボードは弁護人にカヴェイニャックを庇おうとすれば逆に彼を不利にすると論されたという。その後でジョレースは硝子工場労働者がストライキに突入する過程について、時系列に従って法廷での証言のように克明に述べた。まずジョレースは解雇の口実となった労働組合大会出席のための「無断欠勤」について、無断欠勤ではなく会社に伝えられた上に交代要員も完全に確保したうえで欠勤であり、組合大会出席のための欠勤を会社は認めていなかったのが一般の欠勤扱いにしたかもしれないといった。7月29日火曜日に組合大会から帰ったボードとペルティエの2人は出勤を拒否されたので、同日工場の労働者は作業を中断しないように午後と夜に分けて集会を開いて経営側に代表を送ったが、拒否されたと言う。大会工場労働者はタンク窯の溶解した硝子が固まらないようにすべて壘を製造して使いきるまでストライキを行わないとして交渉したが、会社はすぐに炉の灯を消すと回答した。これらの交渉はジョレースがまだ電報で知らされて現場にたどり着く前の36時間の出来事で、7月31日木曜日にできる限りの譲歩をしてでもボードの

解雇を阻止しようと努めたが会社側は譲歩しなかったために、ジョレースは仲裁[☒]1892年12月27日仲裁法によるがこの仲裁法は強制的仲裁法ではなかった[☒]を求めて3日間待ったが経営者に拒否された。ジョレースは労働者に解雇の危機が迫っている、ルセギエの条件を受け入れて職場復帰することを勧め、労働者は抵抗したが勧告に従って仕事に戻ることを決定し、解雇された2人の家族の生活を支えることにした。ジョレースは労働者に求められてブスケに赴いて抵抗を受けたが同様の措置を取らせた。しかし社主のルセギエは労働者に「私はあなた方の決定を全く考慮に入れず、今朝の私の掲示を変えない^{☒30☒}」と返答してきた。掲示とは工場は首謀者を排除したうえで再開されるという内容であった。8月15日にルセギエは最後の給与を支払い、解雇を通告した。この日からストライキは始まるが、職を失った労働者によるストライキであって、9月29日まで継続された。この間にフランス全国やイギリス、アメリカまで救援の資金が集められた。9月29日の労働者の集会には警察の取り締まりが強化され、労働組合員は逮捕され、警邏の警察官が集団を解散させたという。さらに県知事や県出納長が直接関係者の私宅に出向いて懐柔や利益供与の申し出を行って、さらには工場で就労することをもとめた例をいくつも挙げた。硝子工場の労働者数が極端に不足したからである。県知事が直接ルセギエの工場の操業再開の炉への火入れ式に出席したことを民事への介入であるとジョレースは非難している。翌10月25日の演説では、経営側から求められて職場復帰した硝子労働者について取り扱っている。合法的な職場復帰を解雇された抵抗委員会は妨害せず、委員会の同意を得て工場の門前まで連れ添って復帰した例まで挙げている。ルセギエは政府の援助を待つまでもなく全国各地の硝子労働者を徴募するために行動を起こし、ドイツの労働者にまで働きかけたという。各地にカルモーの実情を知らせる労働者集会を開くと、ボードは突如軍に徴兵され、経営者は就労妨害だとして警察を呼び、移動の車両にまで憲兵が尾行したという。各地から連れてこられた40人のうちボルドーやシャンパーニュから来た労働者は実情を知ってストライキは終

わっていない、話が違うとして帰ろうとすると、18人の労働者に抵抗委員会が帰りの運賃を支払ったところ、すぐに2人の抵抗委員会の支援醸金の横領罪で会計係が逮捕されたことをジョレースは報告し、権力の濫用を糾弾した。会計係が逮捕された同じ日の夕べにルセギエの暗殺未遂事件が起きたとしてカルモー市は戒厳令布告と同様の状態に置かれた。ジョレースと彼に招かれて同市を訪れていたジェロー・リシャール GÉRAULT-RICHARD、トゥサン TOUSSAINT、グルーシエ GROUSSIER らの議員が宿泊していたホテルの入り口はすべて閉鎖されて外界との接触を断たれ、ジョレースの所持品と文書が検査されたとして、これらの事態について国璽尚書³¹法務大臣³²のトラリュエ TRARIEUX をジョレースは詰問した。翌夕方にジョレースたちが外出すると、騎馬憲兵が追い回したと糾問する。加えてジョレースは前日の夕方にタルン県知事ドゥーがカルヴィニャックが有罪になるとカンタル県元老議員バデュエル BADUEL に語ったことを元老院議員自身が公言したことを暴露した。ジョレースは彼の演説の末尾でカルモーの事態が修復可能であり、硝子労働組合は妥協するとの姿勢を彼に電文を送ってきて、新規に会社が外部から雇い入れた労働者も認めると、さらには工場再開を求め仲裁を受け入れると言っていると伝えてきたことを明らかにし、代議院議長が政府に仲裁を提案することを求める決議文を提出した。議長はこの提案を受け入れようとしたが、レーグ内務大臣はルセギエを擁護して労働組合を非難し、リボ首相は提案を拒否して信任を求め、賛成272票対反対202票で右翼議員の票によって信任され³¹た。

2番目のジョレースのカルモー硝子工場ストライキについての演説は、アルビ労働者硝子工場設立に向かっていた1896年6月8日に行われた。この時に問題としたのはメリーヌ新内閣の内務大臣バルトゥ BARTOU が行う行政の粛清運動である。オポルチュニスト＝穏健共和派のリボ政権から急進派のレオン・ブルジョア政権に移行したことによってタルン県知事ドゥーは左遷されてプラナカサーニュ PRLANACASSAGNE が任命され

たが、ブルジョア政権の後に再びオポルチュニストのメリーヌ MÉLINE 政権に戻るとオポルチュニストに忠実な県知事をバルトゥは任命した。まずジョレースは前知事ドゥーのもとで知事がルセギエの新聞「ル・テレグラム」に公然と協力を申し入れたことを問題にし、この事実を示す証拠の文書を入手したことを明言した。そしてカトリックの「加担派」ラリエの協力によってようやく多数派を維持するメリーヌ政権が不安定な状態が続くと指摘した上で、この年の市町村選挙で社会主義派が大躍進してリール、リヨン、マルセイユ、ルーベ、リモージュなどの大都市で勝利して、タルン県でも急進派と社会主義派がアルビ市で勝利して、他の地域でも社会主義派が議席を増やしたことを強調する。この演説ではカルモアの硝子工場ストライキ事件は「ル・テレグラム」紙とカルヴィニャック裁判について以外は中心的テーマとして取り上げられなかった。

第3のカルモア硝子工場ストライキに関するジョレースの演説は1896年11月5日に行われた。はじめにジョレースは10月25日にアルビで労働者硝子工場創立大会の翌日に行われた、カルモアでのカルモア鉱山の労働組合が主催する社会主義派議員の講演会が行われた日に起きた重大な出来事を問題にすると前置きする。平穏にかつ盛大に行われた創立大会にさえも80人の騎馬憲兵が警備し、兵舎では将校と兵士が待機していたが、この不穏な状況は翌日深刻化したという。まずカルモアでは政府が市当局から警察権を剥奪したのは何故かを内務大臣バルトゥに聞いた。警視はカルモアを48時間戒厳令下に置くと社会主義者のカルモア市長を脅して、市長は驚いて県知事に問いたす事態さえ起きた。このカルモア市に不穏な状況が生まれたのは、アルビに多くの労働者が移ることに打撃を受ける商工業者をルセギエと与党オポルチュニストの地元政治組織が扇動し、ルセギエの工場の労働者には職長が抗議するためのホイッスルを配布したことを問題としたばかりではなく、背後で政府がこの運動を組織する役割を果たしたと指摘する。駅に接近することを阻まれる前に150人ほどのジョレースの仲間は駅とルセギエの工場の真向かいにあるマラテール・ホテル

Hôtel Malaterre に入っていて、講演会のためにカルモーに着いた議員たちは仲間たちの「カルマニョール Carmagnole」革命期の革命歌とルセギエの工場から出てきたデモ隊の笛の音に迎えられた。すぐさま警察はホテルに進入して「カルマニョール」の演奏と合唱を妨げたという。議員たちが夕食をとる間、ジョレースの求めで静謐が保たれたが、ホテルを出ようとした議員たちを野次とホイッスルの音が浴びせられ、ものが投げられた。ジョレースは翌日の反対派の新聞が社会主義派の議員はこの日カルモーで歓迎されなかったと印象づける記事を書くための演出ではなかったのか疑う。労働組合会館でマルセイユ市長フレスィエール FRAISSIÈRES の司会のもと3千の聴衆を迎えて講演会は開かれたが、聴衆の中には150人の反対派が入り込んでいたという。妨害者は排除されて静かな環境で講演会は始められたが、立ち会った警視によって集会解散が命令された。これは翌日の「ル・テレグラム」紙の報道によると、ルセギエやレイユ男爵と結びついた政敵の求めに応じたためであるとジョレースは言う。かつて第二帝政のもとで政治的自由を抑圧されていた共和派が、合法的な社会主義共和派の集会の自由を、市民的自由を認めないことにジョレースは強く抗議した。その矛先は内務大臣として警察権をストライキ労働者の弾圧に用いたバルトゥに向けられていた。やがてバルトゥ1934年に成立したドゥーメルグ国民連合内閣の外務大臣としてヒトラーの領土拡張政策を押しとどめるためにストレーザ会議でムソリーニを味方にしてヒトラーと分断しようとしたバルトゥであったが、1934年10月にマルセイユでユーゴスラヴィア国王アレクサンデル1世とともに暗殺されたために、彼の目標は死後ラヴァルに受け継がれるが、ムソリーニのエチオピア侵略で頓座して果たされなかった。彼はまた第1次世界大戦前夜においてはドイツとの敵対関係を強め、国際緊張を生み出した「三年兵役法」を通過させた首相であり、ジョレースとはドレーフス事件と関連する1894年12月24日の代議院で陸軍軍事刑法典をめぐる議論からクリスマスに決闘まで行った宿命的政敵であった。

ジョレースは終生社会主義は共和政を支持し共和政を社会的平等の実現によって補完する社会的共和派であるという確信を強く抱き、彼の政治的信条の核心となっていた。これら3回のカルモアの硝子労働者を支援する演説でもその底流を形作るのは共和政によって実現された労働組合法に基づく労働者の生存を確保するためのストライキ権の擁護であり、円滑な労働と資本の間の紛争を解決するための労働関係仲裁法の意義の重視であった。

1895年10月28日に上記の第1回目の演説によって根底から揺さぶられたリボ内閣は、「南部鉄道汚職事件」でとどめを刺されて倒壊した。直後の10月1日に社会主義派に近い急進派のレオン・ブルジョア内閣が成立し、2回硝子工場労働者とルセギエの仲裁が試みられたが失敗に終わり、硝子労働者のストライキがルセギエのロックアウトによって敗北が確定的になった1895年11月14日に、ジョレースは「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に「カルモアにて  ³²と題する記事を書いて、カルモア硝子工場労働者のストライキがリボ内閣を根底から揺るがす政治危機を生み出し、ルセギエは当初の労働組合を壊滅させようとする企みが失敗したことを指摘したうえで、最後に失職した硝子労働者は「硝子労働者に硝子工場を verrerie aux verriers」³³という着想にたどり着いたとして、こう書いている。

「この時期に生活協同組合のメリットと危険を論じることは問題ではない。生活協同組合を動かす精神に従えば、生活協同組合はブルジョア的生産のカリカチュアにも労働者の教育の機関にも、かつ社会主義者の闘争の道具にもなりうる。そして多分カルモアのストライキの間中、多くの生活協同組合は見事に彼らの義務を果たした。

この時期に本質的なことは敵に一撃につぐ一撃を与え、敵が驕りの狂気のために生け贄にしようとした者たちを救い出すことである。そして乗組員を打ちのめすために船を転覆させようとしたので、組合活動家の避難所となる別の船を建造しなければならないからである。

そして労働組合組織はカルモアの硝子労働者が自分のために硝子工場を創立して、利己的な狭い金儲け主義の精神に流されることを恐れてはならない。多分新しい企業は堅固な産業的基礎を持たなければならないし、持つであろう。数日中にカルモアの硝子労働者の硝子工場が機能する技術的、産業的な条件を我々が明らかにする時、考えうる限り最も現実的で最も強固な企業が誕生するであろう。

しかしこの企業は同時に広い社会主義的精神が染みとおったままとなるであろう。この企業は硝子労働組合と、フランス硝子労働組合連盟と緊密な関係を結ぶであろう」。

ジョレースはこう語って、新しい労働者工場のあり方を示している。

第3節 アルビでの「労働者硝子工場」の設立と経営

1895年11月26日に「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に発表した「労働者硝子工場  と題する記事にはパリの労働組合と生活協同組合が8日間にわたって新硝子製造会社の定款について議論して決定した事を伝えている。新会社は株式会社として設立され、取締役会は9名によって構成され、そのうち6名が工場労働者によって工場労働者から選ばれる、積立金には20%以上が控除される、利潤の40%が退職年金、疾病・失業保険に確保されるなどが定款で定められたという。株主は生活協同組合であり労働者は個人的には資本の所有者ではない、労働者代表は配当金を受け取れないなどがこの記事で説明されている。新会社はあくまで資本主義の枠内での株式会社であるが、株主は労働者組織であること、ゲード派が望む政治組織の参加は排除されることが強調されている。

12月25日付の「ラ・デベッシュ」紙に掲載された「ヴィエイユ・タンブル通り  と題する記事では、ルセギエがジョレースと「ラ・デベッシュ」紙と「ラ・プティット・レピュブリーク」紙を「不当介入 ingérence inaccptable」で損害賠償をもとめる訴訟を起こしたこ

とが伝えられ、ヴィエイユ・タンブル通りの行動委員会あての醸金を訴えて、引き続き妨害にたいして警戒を訴えた。また「ラ・プティット・レピュブリーク」紙12月30日号には「労働者硝子工場の敷地についての意見対立」と題する記事では、労働者硝子工場の敷地をカルモーにするかアルビにするかで意見が対立したために、パリでカルヴィニャックとカルモー鉱山労働組合とカルモー市社会主義委員会の代表が硝子労働者の代表と話し合うことを伝え、ジョレース自身は選挙などの個人的都合ではなく硝子労働者にとっての利益を最優先させると関係者、支持者に訴えている。このジョレースの無私公平な立場の表明の後で、裁定審判会 tribunal arbitral が設置されたと伝えている。カルモー市選定をもとめるカルヴィニャックたち3名は社会主義派代議士ウジェーヌ・ボードン Eugène BAUDIN と「ラ・プティット・レピュブリーク」紙編集者アンリ・テュロ Henri TUROT を代表に委任し、ボードらの硝子工場労働者側3名は社会主義派代議士のジェロー・リシャールとヴィヴィアニを選んだ。議長となる5人目の裁定者にはミルランが選ばれた。1896年1月6日に裁定は労働組合代表と社会主義派議員の前で読み上げられた後で、夜8時から鉱山労働組合会館のホールで3,000人の前でアルビに工場敷地が決まったと発表されると混乱が起き、カルヴィニャックは激怒したといわれる。急進派のアルビ市議会議員アンドリュー後のアルビ市長ばかりか、ジョレースも移転反対派から激しい攻撃を受けた。この硝子工場と労働者の移転は、ジョレースがドレーフス事件に深くかかわったこととともに1898年総選挙で彼が落選する大きな要因となっていく。1896年1月11日にカルモーの労働者代表に手紙を書いて早く労働者と社会主義者の連帯が戻ることを期待しているとしている。

1月22日の「ラ・デペッシュ」紙に掲載した「正しい道」と題する記事は裁定発表後のジョレースが危機的状況に陥っていたことを伝えてくれる。議会では保守派やオボルチュニストの議員の間でカルモーの事件がかなり話題となっており、これらの議員たちの10人中

8人はなんとしてもカルモーに留まりたかった硝子労働者が裁定で無理やりアルビに移転させられたと考えていたと言う。事実は逆で、最初から硝子工場労働者はアルビ移転を望んでおり、経済的利点を配慮して260票対60票³⁷の圧倒的多数でアルビを選択したのだが、商店経営者や、土地所有者、鉱山労働者が町の利益に打撃を与えると、あるいは社会主義勢力を減少させるとして猛烈に反対したのだとジョレースは言う。パリに資金繰りに行ってロシュフォールが10万フランを調達してくれたことをジョレースがカルヴィニャックに伝えたと、彼はアルビ移転がカルモーに大きな反対の感情が生まれると忠告し、市議会議員たちも同様の意見であった。公共集会³⁸11月15日の7,000人規模の集会といわれる³⁹で硝子工場労働者の同意を得たうえでカルモーと硝子労働者の別れはないとジョレースは言ったが、これは不用意な発言で市民と硝子労働者の両者から失望を買ったとしきりに彼は反省し自分を責めている。そして最終的にあくまで彼はカルモーの議員に留まるとの決意を表明している。

それから3か月もたっていない3月11日にジョレースは「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に「労働者硝子工場⁴⁰」と題する記事を發表してルセギエが160万フランという巨額の損害賠償を求める裁判の検察官ジャンスル GENSOU が労働者硝子工場は「幻想」でしかないと言った傾向的発言を問題にしながら、工場建設は着々と準備されてロシュフォールが10万フランを調達してくれたほかに、行動委員会が20サントームの券販売によって労働者の醵金を募り3月1日までに115,000フランを集めたと報告し、硝子労働者が建設・土木作業に従事して工場周囲の壁が完成し最新式の硝子溶鉱炉が完成間近である、ノール県では労働党⁴¹ゲード派⁴²が中央地方では革命中央委員会⁴³ヴァイアン派⁴⁴が券の販売に協力していると報告している。硝子工場落成が近づいた10月18日には「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に「10月25日⁴⁵」と題する記事を書いて、ロシア皇帝ニコライ2世の訪仏⁴⁶10月5日 - 9日⁴⁷に際して歓迎の祝祭を超党派で祝おうと政府は目論んでいるが、フランスに新

しい義務を課すると明言した与党オポルチュニストの政治家レイナル RAYNAL の発言を問題にしながら、労働者側の祭典すなわちアルピ硝子工場落成式が10月25日☒実際には1日遅れて26日☒に祝われようとしていることに目を転じて、経営者側の妨害にもかかわらず工場は完成したことを強調している。10月26日の設立式での演説でジョレースは労働者硝子工場の設立の後には社会共和政が到来すると述べている。翌日には社会主義派議員たちによる講演会が開かれ、この日に起きた硝子工場経営者ルセギエ側の妨害行為について内務大臣バルトゥを代議院で追及する予定であった10月29日に、ジョレースが短期間だけ定期寄稿したパリの四大紙のひとつである「ル・マタン ☒☒☒☒☒☒」紙にこの対政府糾問質問を予告する「本当の問題 ☒☒☒☒☒☒☒☒☒☒」と題する記事で急進派の問題を取り上げている。社会主義派は穏健共和派＝オポルチュニストの第3次リボ内閣が1895年10月28日に倒れた後に成立した短命な少数派レオン・ブルジョア内閣を無条件で支持したが、急進派はカトリック勢力の「ラリマン☒加担☒」によって右傾化した穏健共和派と異なり共和主義的民主主義の伝統に忠実であるが、政権は労働者の運動には不安を覚えて慎重な立場に立ったと評価している。この日予定されたジョレースの演説はバルトゥがこの件についての情報を待つために11月5日に延期された。この演説は上記硝子工場に関する第3の演説で詳しく論じた。

同年11月30日にはカルモーでジョレースのほかミルラン、ヴィヴィアニ、ヴァイアン、ショーヴァン CHAUVIN など10人の社会主義派議員と急進派のペルタンの講演会が反対派の妨害を受けて中止され、カルヴィニャックや硝子労働組合の指導者オークチュリエ AUCOUTURIER とともにショーヴァン議員が杖で警官を殴打したとして逮捕される事件が起きた。この騒ぎの中で演説したジョレースの発言の内容は「カルモーにて ☒☒☒☒☒☒☒☒☒☒」と題されて翌12月1日の「ラ・デベッシュ」紙に載せられた。この記事の中でジョレースはなぜカルモーが攻撃的の的にされているかについて、2つの理由を挙げている。一つはカルモーが小都市で社会主義が強

い大都市よりも攻撃する条件が整っているからであり、第2にカルモーには硝子工場経営者ルセギエと鉱山経営者レイユが協力しているからだという。この事件があった翌々日の12月3日には不逮捕特権を持つショーヴァン議員を数時間後に「現行犯逮捕」し、翌日公判の最中に代議院で釈放を求められて責任者の後のダルラン提督の父親ダルラン国璽尚書⁴¹法務大臣⁴²が処罰される事件の詳細を、ジョレースは「最後のことは⁴³」⁴⁴「ル・マタン」紙12月3日号⁴⁵と題する記事で伝えている。12月27日にはカルモーに縁もゆかりもない穏健共和派の重鎮の議員で後の大統領デシャネル DESCHANEL が社会問題と社会主義について講演会を行うと予告されて、おそらくは意外さに驚いたジョレースが、「自由な討論⁴⁶」と題する記事を「ラ・プティット・レピュブリーク」紙12月27日号に書いている。

1896年12月22日から労働者硝子工場について沈黙していたジョレースは3か月ぶりに1897年3月25日に「ラ・デペッシュ」紙に書いた記事の題名は「救援を求める⁴⁷」であった。警察の監視下におかれて敵の攻撃にさらされていた労働者硝子工場は、発足したばかりのこの当時になりに深刻な危機に陥っていた。工場労働者のうちの「アナーキスト系」の4名は規律義務違反で解雇されたが、革命的サンディカリストのフェルナン・ペルティーエに支持されて会社を訴え損害賠償を求めたが、裁判官たちは労働者が経営する会社に批判的であった。さらに硝子壺の在庫はかさみ、資金は枯渇して全国の労働者に救援を求めなければならない状況にあったことはこの記事の内容から明らかであった。

翌年3月に「有権者へ訴え⁴⁸」⁴⁹「ラ・デペッシュ」紙1897年5月2日、「ラ・プティット・レピュブリーク」紙同年5月5日⁵⁰で4か月この方3回議会活動報告に来て3度目もまた暴力によって阻止されたと訴えた。駅で政敵の一団が待ちかまえていたので到着を遅らせたけれど、妨害を阻止しようとした市長が逮捕されたのだという。カルモーでの議会報告を諦めて周囲の町で報告を行おうとしてもすべての町で妨害を受けて中

止せざるを得なかったという。⁴³

とうとうジョレースは彼が教鞭をとっていた大学がある近隣のトゥルーズ市で5月13日に講演会を行った。この日の講演会での演説は5月14日に「ラ・デパッシュ」紙に「トゥルーズの講演会 ⁴⁴」と題されて掲載された。この演説で労働者硝子工場は当初の困難を乗り越えて順調に売り上げを伸ばして、社債の発行にも成功したと報告している。しかし当時のメリーヌ内閣が強固であり、デュピュイ内閣やカジミール・ペリエ内閣を倒したように容易には倒せないと分析している。社会主義者が急進派のレオン・ブルジョア内閣を支持した時に中道派はあっけにとられて驚いたが、内閣は累進所得税導入に対する元老院の抵抗の前に退いた。改革に対し元老院が障害になっていると指摘している。その後で外交についてジョレースは語り、ロシアはトルコがギリシア人を弾圧するのを放置して、アノトー外相もこれに手を貸し、アルメニアとクレタで30万人のキリスト教徒が虐殺されたと推定する。ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世とロシア皇帝ニコライ2世とイタリア国王ウンベルト1世の反動的政策でギリシアとフランスは敗者となっているが、前者は抵抗したため後者は為政者の低劣さのせいであると批判した。演説を終えると予想された事件が起きた。ジョレースに許されて労働者硝子工場を解雇されたヴァレ VALLET が発言を行い、労働者工場を中傷し、ジョレースは工場側を擁護した。その後で労働者硝子工場のアムラン HAMLIN は妨害を乗り越えて労働者硝子工場は勝利するとの報告とカルヴィニャックがこれを支持する演説を行い集会は終了したと記事は伝えている。同年6月12日の「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に載った「明らかなこと ⁴⁵」では「ル・タン」などの政府寄りの大新聞が労働者硝子工場は破綻に陥っていると報道をしているが、明るい見通しもあるとの本音を言っている個所もあるとも報道が述べていると伝えている。翌月の7月3日の「ラ・プティット・レピュブリーク」紙の記事「本当の回答 ⁴⁶」ではルセギエが損害賠償をもとめた上告を破毀院審理部が棄却したことを伝えている。

この章で伝える最後の硝子工場に関する記事として「ラ・プチット・レピュブリーク」紙に同年10月2日に掲載された「トゥルーズとアルピ^{図45}」を紹介する。同年9月20日から25日まで開催された労働総同盟 CGT に参加した264労働組合と労働取引所連盟の77人の代表が公式に労働者硝子工場を訪問したことをこの記事は報道した。ジョレースは工場の経営にはあくまで関与することを控え、この工場に対する中傷に対してだけ擁護の論陣を張ったと主張している。ジョレースの見解は政治的な領域の政党と経済的領域の労働組合は友好的であるべきで相互に干渉するべきではないとの立場である。フランスの労働組合全体の代表が公式に労働者硝子工場を訪問したことは、実験は終わった、労働者工場は失敗したと主張する資本家側の中傷への強力な反撃であるとジョレースは指摘したうえで、自宅、カフェ、オーベルジュ^{図46} 生活協同組合で労働者硝子工場の製品を買いもとめることを訴えている。

第3章 タルン県以外の他県のストライキ運動へのジョレースの支援——ロワール県リヴ・ドゥー・ジエの金属労働者のストライキと、エロー県のグレースサック、ソーヌ・エ・ロワール県のモンソー・レ・ミヌ、カンタル県のシャンパニャック、ガール県グランコンブなどの炭鉱労働者のストライキ支援を中心に——

第1節 ロワール県リヴ・ドゥー・ジエの金属労働者のストライキをめぐる

カルモアの硝子工場労働者のストライキに2年以上先立つ1893年3月28日に、ジョレースは代議院で政府に対してロワール県リヴ・ドゥー・ジエの金属労働者のストライキについて質問した^{図47}。主要な論点はなぜストライキ取締に向けて労働者が妥協に向かっていた時点で、政府と内務省そしてロワール県知事が治安部隊を現地に派遣したのかへの答弁を求めた点であっ

た。まずジョレースは労働者がなぜストライキに突入したかという事情を詳細に説明した。やがて彼の議員生活の大きくのしかかることになるカルモー硝子工場の場合と同じく、労働組合に敵対的な経営者が労働組合の指導者が労働組合全国連盟の大会に参加したことを理由として解雇したことに始まる。その底流には工場内での労働組合の存在をどうしても認めたくない経営者と、こうした頑なな経営者を暗黙に後押しするオボルチュニスト政府の存在があったという。

具体的な事態の推移を次のようにジョレースは述べる。リヴ-ドゥ-ジエの金属労働者は金属労働者連盟を通して経営者に11時間労働を、すでにロワール地方では広く認められていた10時間労働に減ずるように要求していた。1881年からこの町でも10時間労働制であり、超過労働については賃金が支払われていたが、この制度がなくなって11時間労働制に戻っていた。経営者側は労働者の要求を認めて10時間労働制を認めようとしたが、マレル MARREL 製鉄所の経営者だけは理由を示さずにこれを拒んだ。金属労働者の代表10人との交渉の最中に経営者のマレルは労働組合を認めないと発言したばかりか、リヴ-ドゥ-ジエ金属労働組合議長ガニャGAGNATを解雇したので、彼の工場労働者だけは2週間のストライキに突入した。2週間たってもマレルは妥協せず、賃金と労働時間、工場労働者委員会の承認などの問題で対立が起こりストライキはこの町全体に広がった。しかし困難に直面して350人の労働者が妥協して職場復帰しようとしていたのに県知事は治安部隊を呼び、小学校を休校にしたことを問題とした。最後に政府は労働組合の自由を尊重する決議を提案して、賛成353票反対138票で可決された。

第2節 1894年のエロー県のグレースサックの炭鉱労働者のストライキ に対する支援

ジョレースは1894年6月8日にエロー県のグレースサック Graissessac 炭

鉱を訪れて、集会で演説をしてストライキ中であった鉱山労働者を激励した。この300人の鉱山労働者の解雇に反対するストライキは5月7日から9月4日まで続いた。ストライキ中の労働者によるこの集会には近隣の地区からの参加者を含め1,500から2,000人の聴衆がジョレースの演説を聴きにやってきて、会場は満員であったという。ストライキがまだ続いていた同年7月7日には代議院でも短い発言ながらこのストライキに言及して、鉱山労働者代表 *délégués mineurs* の半数が解雇されたことについて、公共事業大臣のバルトゥーに聞いた。大臣は法律に従って彼らは鉱山労働者代表の資格で警備の仕事を続けていると主張したが、ジョレースは解雇された月に4日のみ鉱山労働者代表であった彼らには月に4日分の賃金しか支払われていないと反論した。⁴⁸

こうした政府の労働関係立法を改悪する方針の背景には、労働組合に対する敵対的な姿勢があるとして、同年6月19日の「ラ・デペッシュ」紙に「後退 ⁴⁹」と題する論説を発表して1884年の労働組合法制定以降に法解釈と判決によるなし崩しの同法の空文化をはかる司法の反動化が進んでいると警告する。その顕著な例として、解雇された労働者が同じ労働組合にとどまるためには同じ職種で働き続けなければならないとするギルマン修正法 *amendement Guillemin* を挙げている。同年10月2日の同紙に掲載された記事「鉱山労働者退職年金法 ⁵⁰」では元老院で修正されたけれども立法化されたこの年金法の意義について強調しながらも、年金支給年齢や支給額、年金積立の経営側と労働者の分担割合などについて改善していかなければならないと補足している。

第3節 1895年の代議院鉱山小委員会のソーヌ-エ-ロワール県のモンソー-レ-ミヌ鉱山とパ-ドゥ-カレー炭田の労働条件の調査について

1895年2月4日にモンソー-レ-ミヌ Montceau-les-Mines 鉱山で火災事故

が起き、28名の犠牲者を出した。すでにこの事故の前に1893年12月のパ
ドゥ・カレーでのストライキの後で鉱山労働者の労働条件と社会保障につ
いて調査する調査委員会の設置を代議院は決定していたが、最初に鉱山事
故が起きたモンソーでの調査から始められることになり、ジョレースは鉱
山小委員会の一員として調査に加わった。この調査は炭鉱火災の事故原因
究明をも兼ねることになった。その詳細は1895年2月21日に「ラ・デベッ
シュ」紙に掲載された「モンソー-レ-ミヌにて  ⁵¹」
と題する記事で報告している。この記事でこの鉱山会社ではシャゴ
CHAGOT 社主と一族によって社宅から子供の学校まで隅から隅まで管理
されていて、人為的ミスが原因として存在したのだが、労働者は会社に隷従
していて真実の声が伝わってこないと彼は指摘する。同じ「ラ・デベッシュ」
紙の2月28日号の「調査  ⁵²」と題された記事でモンソー-レ-ミ
ヌでは支配階級と政府が労働の実情を国民の目から隠すのにこれほどよく
出来ているところはないと指摘して、与党と野党の合同の労働委員会でさ
えも会社の労働者に対する監視によって労働者の真実の声を聴き出すのが
むづかしかったことを伝えている。

鉱山調査小委員会の調査委員会は1895年2月のモンソー-レ-ミヌ鉱山の
調査の後で、4月にはパドゥ・カレー炭田の調査を行い、この調査にもジョ
レースは参加している。彼は「労働者の状態  ⁵³」と題
された同年4月10日に「ラ・デベッシュ」紙に掲載された記事で、この調
査の報告を行っている。彼によればノール地方の経済恐慌の影響は農業か
ら工業に及び、鉱業にも影響を及ぼして労働者の賃金を維持するためには
過酷な労働を強いられ、失業の時代が到来したという。鉱山会社は炭鉱労
働者街の住居を所有しており、労働者長屋 coron の家賃を値上げすること
で実質的に賃金引き下げを行っていた。彼はラン Lens 市サン・ピエール
街 cité Saint-Pierre のヌー-Noeux 団地にブーロネ Boulonnais のセメント
用石灰採掘鉱山から失業して引っ越してきた家族の悲惨な例を目撃してい
る。家には一つの鍋しかなく会社から前借りした引っ越しの費用を返済で

きないでいた。また母親を亡くし父親は姿を消して6人の子供が残され、14歳の長女は野で摘んだ野菜のサラダを売って5人の兄弟を食べさせていたという。

第4節 カンタル県シャンパニャックの炭鉱労働者のストライキをめぐって

フランス中央山地にあるカンタル県シャンパニャック炭鉱の労働者のストライキは2か月間続いているとジョレースは1895年7月24日の「ラ・デベッシュ」紙の「シャンパニャックにて  と題された記事で伝えている。このストライキは宗教上の自由、良心の自由をめぐって起きたと、すなわち世俗的葬儀に列席したという理由で労働者は解雇されたことに抗議して起きたのだという。共和主義者にとって、自由な精神を持つ人々にとって問題は深刻であると彼は主張する。先日彼が訪れたりモージュでも同様な事件が起きていて、コルセット製造女性労働者に作業所に併設された礼拝堂で祈祷することを強制して、これに従わなかった労働者は解雇されたという。彼は精神の自由に関する解雇を避けるために民法典の賃貸契約に関する規定を改正する必要があると主張した。資本家ブルジョアジーがカトリック教会を利用して労働者の思想の自由を侵害するのを防ぐためにはこの時期未だ雇用関係についての主要な法的規定となっていた民法典の賃貸契約についての部分を修正して、労働組合に加入した労働者を解雇した雇用者を罰する法案を可決する必要があると主張する。すでに代議院ではこの修正案は可決されていたが、元老院で否決された。ジョレースはさらに宗教的理由で労働者を解雇した雇用者を罰する罰則を定めることを求めている。

相次ぐ労働争議で労働者側から、労働組合側から仲裁が求められても、経営側・雇用者側からほとんどすべて拒絶されているのは仲裁法に強制と罰則の規定がないからであるとして、仲裁法の改正をアルマヌ派とボシ

ビリストを除く35人のゲード派とヴァイアン派と独立社会主義派の社会主義議員グループが要求し、ジョレースは1895年11月21日の代議院で提案の趣旨を説明した。この時までにはジョレースが深く関わったカルモーの硝子労働者を含むリヴ・ドゥ・ジエの金属労働者やノールやパ・ドゥ・カレー炭田の鉱山労働者が要求した仲裁を経営側はほとんど拒否してきたが、ジョレースたちが要求するのは保守的仲裁者によってストライキ権が否定される強制的仲裁ではなく、労働組合の存在が経営側によって否定されている現状を変えるために労働規則 *règlement du travail* によって労働組合を公認した上での仲裁を求めたのである。

「雇用者が一人か複数の被雇用者が労働組合活動か政治活動に参加したことを理由に解雇するか罷免した場合は100フランから1,000フランの罰金で処罰される⁵⁶」とする第4条を含む全4箇条の1892年12月27日法⁵⁷仲裁法⁵⁸の修正案を35名の社会主義派議員が署名して提案した。

第4節 グランコンブの炭鉱労働者大量解雇と1897年の大ストライキ

1897年4月12日に南フランス・ガール県のグランコンブで従業員の従業員の約3分の1にあたる1,100名の解雇に抗議してストライキが開始された。このストライキの背景について、ジョレースは1897年5月24日に「ラ・グランコンブにて  と題する記事を「ル・マタン」紙に発表して詳しく解説している。会社は大量解雇に至ったのは石炭運搬費の高騰と安価なイギリスの石炭が輸入されたことなどを理由に挙げているが、会社がパリ・リヨン鉄道に輸送費の引き下げを求めるかわりに鉱山労働者を犠牲にしたと批判している。加えてグランコンブ市長で県議員を務めるこの鉱山の社長エミール・グランファン Émile GRAFFIN が選挙の票を獲得するためにガール県の農民を職員として大量に雇用していたこと、鉱山労働者の退職年金基金を義務化したのにこの基金の支払いを回避するために老齢の労働者を年金支払い前に解雇したことなどを暴露してい

る。

ストライキを指導した労働組合委員長は社会主義者ではない穏健な共和主義者のギスターヴ・ルケット Gustave ROUQUETTE で、作業員の鉱山作業区人員適正配置に基づく交替輪番制と労働時間短縮によって解雇を避けることを提案し、会社側フュマ FUMAT 技師によって受け入れられたが、会社はフュマを解雇し、2,500人がストライキに参加する大規模な争議となった。ストライキ労働者はバリーらの社会主義派議員に介入を求めるアピールを行ったが労働者側の敗北に終わり、1,000名以上の労働者は解雇された。この敗北はこの地方の労働運動の転換点となって、改良主義の限界を悟ったルケットと労働者は社会主義へと志向するようになった。

1897年6月12日に代議院でジョレースはグランコンブのストライキについて発言して、経営の怠慢を経済危機によって正当化して1,200名もの労働者を解雇した会社の責任とフュマが受け入れた打開策を支援せずに、労働者の大量解雇をもたらした政府の施策を批判した。会社を譲歩させて鉱山の労働者を守る現実的手段が2つあるとして「一つ目は輸送費の問題です」⁵⁹。「もう一つの手段はグランコンブ会社が退職年金基金の維持でおかしたあらゆる失敗と過ちと管理上の悪用を役立てることです。会社は数年来年金支給を保障するために誠実に法に従って積み立てるべき備蓄基金を支給せず⁶⁰に労働者の強制積立金を使い果たしたからであります」と彼は指摘する。

1860年のコブデン - シュヴァリエ条約 Traité Cobden-Chevalier が象徴する自由貿易が前進した時代から1873年5月の銀行危機に端を発するヨーロッパ大不況時代 « grande dépression européenne » を迎え、メリーヌ関税法に代表される保護貿易主義の時代を迎えた。1896年ごろに大不況の局面からヨーロッパは脱出したが、この終末期にフランスでは上記のリヴ・ドゥ・ジエの金属労働者と硝子製造労働者のストライキ、グレースサック、モンソー-レ-ミヌ、カンタル県のシャンパニャック、グランコンブ

などの炭鉱労働者のストライキが相次いだ。またイギリスで1897年には週8時間労働をもとめる大ストライキが機械工の労働組合から海運などの工業部門に広がり、1898年までイギリス社会を揺るがせた。

第4章 全国的問題への取り組み——パナマ事件からドレーフス事件との遭遇までの時代の考察を中心に

1893年のジョレースの社会主義派議員としての初当選から1898年総選挙での落選までの時期のフランスの国際政治と国内政治の状況については國學院法學第57巻第2号と第3号の「露仏同盟の締結から第1次モロッコ事件までのフランス政治とジャン・ジョレース 1893年 - 1905年」1・2・完でその大枠の政治的環境について考察した。この章での作業の中心的課題は前記論文で考察したこの時期の国際政治と国内政治の枠組みの中でジャン・ジョレースがいかなる政治活動を行い、いかなる結果に行き着いたかを分析・考察することである。この時代はジョレースにとってパナマ事件への取り組みから始まり、ドレーフス事件に遭遇しアルフレッド・ドレーフスの無罪を確証して関与し始めるまでの時代となる。

パナマ事件によって信用を失墜したかに見えたオボルチュニストの政治は1899年6月22日にヴァルデク・ルソー「共和政防衛」内閣が成立するまで生き延びる。

1893年1月8日 - 22日のアルビ第2区の補欠選挙で当選したジャン・ジョレースが社会主義者の代議士として第一歩を歩み出した時の首相は当時オボルチュニストと呼ばれた穏健共和派の政治家であったアレクサンドル・リボで、生涯に5期首相を務めた彼の第2次内閣であった。この内閣は短命に終わって、その後を継いだのは第1次デュピュイ内閣であった。やがてフランスの世論を二分してジョレースも深く関わることになるドレーフス事件が発生したのはこの第1次デュピュイ内閣の時代においてであった。またジョレースが社会主義派議員として再選を果たした1893年8月20日 - 9

月3日総選挙が行われたのもこの内閣の時期であった。

1893年総選挙以降第1次シャルル・デュピュイ内閣1893年4月4日 - 1893年11月23日 ジャン・カジミール・ペリエ Jean CASIMIR-PERIER 内閣1893年12月3日 - 1894年5月22日 第2次シャルル・デュピュイ内閣1894年5月30日 - 1894年6月25日 第3次シャルル・デュピュイ内閣1894年7月1日 - 1895年1月15日 第3次アレクサンドル・リボ内閣1895年1月26日 - 1895年10月28日 と不安定で短命な穏健共和派 = オボルチュニストの内閣が続き、急進党レオン・ブルジョア内閣を挟んで1896年4月2日に安定したメリーヌの長期政権が生まれた。パナマ事件によって追いつめられたオボルチュニスト = 穏健共和派の政治が立ち直ってメリーヌ政権の長期政権の時代まで存続することができたのは、ひとえにカトリック教会からの救いの手が差し伸べられたからにほかならない。リベラルな立場の教皇レオ13世は1891年5月15日に労働者の劣悪な境遇を改善することへの教会の関与を認めた回状「レールム・ノヴァールム」新しい事柄について を、ついで1892年2月16日にはフランスのカトリック教会が保守的な共和政に加担することを求めた回状「懸念の最中に」 ラテン語 を出した。フランスではこれらの回状に先だってすでに教皇の意向を受けていたアフリカ首座司教でアルジェとカルタゴの大司教であるラヴィジュリ枢機 cardinal LAVIGERIE が1890年11月18日にカトリックが共和政を受け入れることをもとめていわゆる「アルジェの乾杯 Toast d'Alger」を行い、1893年の総選挙までにはカトリック勢力が保守的な共和政を支持する「ラリマン加担Ralliement」の潮流が生み出され、1893年の総選挙では「加担派 Ralliés」の支持を得てオボルチュニスト = 穏健共和派は300以上の議席を得て勝利した。

すでに述べたようにジョーレスが社会主義派議員として当選した1893年1月の補欠選と1893年8月 - 9月の総選挙から1896年にメリーヌが首相の座に就くまでの間、与党の安定多数から想像されるのとは逆に政治的に不安

定な時代が続き、政権は相次いで交代していった。第1次シャルル・デュピュイ内閣が急進派に近い大臣に見捨てられて辞任した後を受けたオルレアン王朝期の著名な首相の孫ジャン・カジミール・ペリエが1893年12月3日に首相の座に就いた。パナマ事件が終息に向かっていた1893年からマチュー・ドレーフュスが陸軍大臣にエステラジー少佐を「明細書」の作者であると告訴した1897年にいたるまでの時代の政治的争点は、やがてフランスを根底から揺るがすことになるドレーフュス事件ではない。この年の12月4日メリヌ首相は「ドレーフュス事件なるものは存在しない」と宣言して事件の鎮静化に努めていた。この大事件がフランス政治の中心的問題となるのは1898年1月13日のエミール・ゾラが当時の大統領フェリックス・フォールに宛てた公開書簡を「オーロール」紙に掲載して以降のことである。ドレーフュス事件はドレーフュス大尉逮捕と有罪宣告後に彼の家族と協力者のベルナル・ラザールとそして事件が発生した陸軍の中枢である情報部
世間を憚って『統計局』と呼ばれていたの頂点に立っていたジョルジュ・ピカル情報部長の周辺で世間にほとんど知られることなく密やかに進行していた。パナマ事件からドレーフュス事件が社会を席卷する1898年冒頭までの間のフランス政治において、いくつかの党派に分裂していた社会主義派は「加担ラリマン」によってカトリック勢力の支持を得たオボルチュニスト＝穏健共和派との対決が最大の課題であり、都市部の労働者階級の支持を次第に急進派から奪って地方選挙において急速に勢力を伸ばしていった。一方急進派は都市部の票を社会主義派に奪われたが、この時期に統一した全国党組織結成に向けて組織化に成功してオボルチュニスト＝穏健共和派の支持基盤に浸透していった。

すでにいくつかの例を述べた全国各地での労働者によるストライキ事件と連携した社会主義勢力が勢力を拡大する中で、孤立したアナーキストは「事実によるプロパガンダ」すなわちテロリズムに訴えたラヴァシオール RAVACHOL らの行動は政府の厳しい弾圧を受けた。アナーキストのテロルが頻発すると1894年「極悪諸法」を制定し社会主義運動の取り締まり

にまでこの法の適用を広げようとする、これに反発した社会主義運動は政府への批判を強めていった。

第1節 パナマ汚職事件と社会主義派議員ジョレースの立場

ジョーレスは社会主義派議員として初当選して間もない1893年2月8日にパナマ事件を取り上げた演説を代議院で行った。この演説は「パナマ事件。その社会的諸結果」と題されて『ジョーレス演説集』に収録されている。パナマ事件についてジョーレスはすでにまだ穏健共和派の議員であった1888年12月8日に「パナマ事件。政府の役割。」演説の題名は『ジョーレス演説集』編集者エドモン・クラリス Edmond CLARIS が付けたという演説を行っている。

パナマ事件とはスエズ運河を開通させたフェルディナン・ドゥ・レセップス Ferdinand de LESSEPS が1880年10月20日に創立した「世界パナマ大 洋 間 運 河 会 社 Compagnie universelle du canal interocéanique de Panama」が1881年から工事を開始したが、難航して資金不足に陥って富籤付債券 obligations à lots 発行が必要とされ、その立法化のためジャーナリストや政治家に支持を得る工作を行ったことにこの汚職事件は起源していた。議会に調査委員会が設置され、多数の政治家や会社幹部などが起訴された—レセップスやエッフェル父子などが起訴されたが、1893年にシャルル・バイオ Charles BAIHAUT 公共事業大臣など少数に有罪が宣告されただけで幕は閉じられた。

1888年12月の穏健共和派議員であった当時と変わらず、一貫してジョレースはパナマ事件を解明する立場を貫いている。この1893年の時点ではブーランジェ派のエミール・グーソ Émile GOUSSOT の対政府質問の際にジョレースはミルランとともに社会主義派議員のパナマ事件に対する全容解明の要求をおこなった。1889年総選挙で一举に議席を失ったブーラン

ジェ派がパナマ事件を契機に巻き返して穏健共和派の政府を倒そうとする企みに巻き込まれることなくパナマ事件の解明を求めようとする立場は、微妙であったことをこの時の発言は物語っている。「この討論に個人的問題を投げかけようとしているのは我々ではありません。共和主義者である我々は共和政のために戦っている人々に対して侵害が加えられるのを喜んでみているのではなく、国民の前で行われている苦悩に満ち胸が張り裂けそうなこの討論から正確で政治的かつ社会的な結論を導き出すことを我々は望んでいるのです」⁶¹と述べて、ブーランジェ派にくみすることなく事件を解明することを主張した。⁶²

代議院でのこの演説のほかにジョレースはパナマ事件について「ラ・デペッシュ」紙に「代議院 ⁶³1893年2月14日」と「二重の結果 ⁶⁴1893年6月26日」と題された2つの記事を書いている。前者の記事では「議会での表面的な精神的混乱のもとで現実には3つの明確な政策と3つの別々の集団がある」⁶³と述べて、第1はこの事件で信用と名誉を失墜させるとして事件の解明を阻もうとする人々であり、第2のグループはカヴェイニャックやデシャネルのようにあるいはティエール失脚以降権力から遠ざけられている精力的に政府要人を非難して取って代わろうとする人々であり、これにデルレードのようなブーランジェ主義右派が合流した。第3のグループは新しい政治が必要であると理解している社会主義者とまれな急進派であり、議会内の有責者ばかりではなく右翼に大目に見られている企業と行政の犯罪者を処罰するべきであると、なぜならば金の力が隠れているからだと彼らは考えるとジョレースは書いている。後者の記事「二重の結果」で1893年6月22日の議会でブーランジェ派の残党が「ノルトン文書 ⁶⁵ 偽造文書を公表してクレマンソーを完全に失脚させようとしたが、偽造文書であることが露見してデルレードとミルヴォワが議員を辞任したことが、極右のショーヴィニズム ⁶⁶排外的愛国主義 ⁶⁷が凋落したと同時に、クレマンソーらの急進主義に代わって社会主義が力を持つようになった背景にあると指摘している。⁶⁴

第2節 1893年総選挙後の第1次シャルル・デュピュイ内閣から第3次アレクサンドル・リボ内閣まで——不安定で短命なオポルチュニスト＝穏健共和派政権へのジョレースの態度——

1893年8月20日 - 9月3日総選挙のあとに第1次シャルル・デュピュイ内閣から1895年10月に倒れた第3次アレクサンドル・リボ内閣までの5期の不安定で短命なオポルチュニスト＝穏健共和派政権の時代は同じく短命なレオン・ブルジョア急進黨内閣をへて安定したジュール・メリヌ内閣にいたる。5期続いた短命なオポルチュニスト＝穏健共和派政権の時代には元ブーランジェ派の議員を含めば50議席ほどを獲得した社会主義派の議員グループは内閣の消長に影響を与えるまでの力量を保持するにいたっていた。

ジョレースは1893年総選挙直後の9月10日に「ラ・デペッシュ」紙に掲載した「代議院における社会主義者 」と題する記事で自分たちの議員グループについて次のような評価をあたえている。

「今では組織された社会主義党派ができて、議会でも国内でも重きをなすようにならなければならないであろう。あらゆる新聞が存在を認め、穏健派はあわてて危険性を指摘している。初めて本当に代議院に社会主義派グループができた。これまでのわれわれは狙撃手であり、宣教者であり、数の少ないまとまりのない活動家であった。旧来のブーランジェ派分子が我々に寄り添っていて彼らは援軍と言うよりは厄介ものであった。今では50人前後いてマルクス主義者、ブランキ派、ポシビリスト、独立社会主義派とすべての社会主義党派から送られていて、古い多少狭量なセクトに取って代わった社会主義者の同盟であり、共同の行動のためには必要な多様性と独自性を保持した我々の党の全勢力を必要として

いた。普通選挙の一種の新しい信任の後で、旧ブーランジェ派は除外されるかひとえに社会主義者として加入するかしていた。それゆえ我々の間には十分な同質性と明確で単一の政策のための可能性があった。さらに我々の傍らには100人か120人の先進的急進派と急進社会主義者がいた。彼らは我々の教義にまでは達していなかった。彼らは最終的な労働の組織化と所有について我々と同じではなかった。しかし我々の最小限綱領の実現のために彼らは我々と歩むことが出来たし、歩まなければならなかった。彼らは国民の前でそれらを約束した。憲法の民主主義的改正のために、大胆で大幅な租税改革のために、鉄道と発券銀行と鉱山という譲渡された大独占の回収と労働時間の規制と労働者農民保護の基本法を支持して精力的に賛成投票をしていた」⁶⁵。

社会主義者となった初期のジョレースのきわめて楽観的な自己評価であったが、実際には社会主義者に対して強硬な姿勢で対決するオボルチュニスト＝穏健共和派政権との困難な闘いに遭遇することになる。

1893年11月21日にジョレースは前記の『演説集』で「共和政と社会主義  と題された有名な演説を行う。この演説はシャルル・デュピュイが議会で政策全般について所信表明 déclaration した後で行った政府質問で、政府がなぜ社会主義者を「扇動者 meneurs」として攻撃するのかを問いかけた後で、社会主義とは共和政の中でいかなる位置を占めるのかを表明した。ジョレースは「真実はフランスにおいて、共和政フランスにおいてあなた方が創設した共和政から、そして半世紀この方この国で発展してきた経済体制 régime économique から生まれました」⁶⁶。「労働者にとって彼らの境遇の改善を手に入れる手段は2つしかありません。部分的で即座で一時的な改善はあなた方がストライキと呼ぶ組合団結権によって手に入れます。持続的で決定的で正規の改善は社会主義思想を現実化する政治権力の獲得によって手に入れます。そしてあなた方は気づいていないのですが、労働組合に社会主義の思想が浸透することに、

単なる職業上の行動から外れて一般的でより高い政治的見解に高めることに苦情を言う時、あなた方こそが組合がとる唯一の行動がストライキしかないようにしているのであり、一方社会主義は組合により有効でずっと広い手段として政治権力の獲得を提示しているのです」⁶⁷。

こう述べて、共和政の中での社会主義の位置づけを説明している。このジョレースによる長大な政府批判の演説を口火に、同月23日に急進派最左派のカミーユ・ペルタン Camille PELLETAN が政府との対話を打ち切ったことから急進派の3人の閣僚が辞任して、議会の不信任決議を待たずに第1次デュピュイ内閣は倒れた。

1893年11月に辞任した第1次デュピュイ内閣の後を受けてカジミール・ペリエ内閣が成立する。前内閣にもましてアンザン炭鉱の社主である大富豪のカジミール⁶⁸はカトリック「加担派」⁶⁹ラリエと協力関係を深め、露仏協商に調印し、フランスを席卷したアナキストの爆弾によるテロリズムを口実に1894年に「極悪諸法」⁷⁰を制定して社会主義者の活動をも取り締まろうとした。

カジミール・ペリエ内閣が倒れる1週間ほど前の1894年5月15日の「ラ・デベッシュ」紙に「二つの政権~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~」と題する記事を書いてオボルチュニストの政権にはかつて左右の反対派が存在したが、右派が「加担」した今では社会主義派と急進社会主義派の左派の反対派しか存在しなくなったと言い、おそらくはあまりにも右傾化したカジミール内閣にかえたいと望むカルノー大統領の暗黙の支持のもとリボとブルジョアは次の政権を担おうとしていると観測している。ジョレースとしては最小限の社会主義派のプログラムを採用して、労働者の団結権を保護し、累進所得税を採用し、ライシテ⁷¹世俗化⁷²の成果をさらに推進する政権を支持すると言っているが、リボはその約束をしていないので、我々は舞台裏での動きから自由な立場に立って、国民と議会の公然の場で闘うと彼は言う⁷³。

第3節 アナキストのテロリズムと「極悪諸法」との闘い

1891年から1893年末にかけてラヴァシヨール RAVACHOL、オーギュスト・ヴァイアン Auguste VAILLANT、エミール・アンリ Émile HENRY などのアナーキストによる「事実☒行為☒によるプロパガンダ propagande par le fait」と呼ばれる爆弾テロルが相次いだ。彼らの死刑執行に際して特赦令を拒否し、あまつさえ「極悪諸法」を公布した大統領としてサディ・カルノーはテロルの標的にされ、1894年6月24日に暗殺された。同月26日に新大統領を選ぶための選挙が行われ、前首相のカジミール・ペリエが大統領に選ばれた。☒71☒カジミールが大統領に選出される直前の彼の首相任期の間にアナーキストのテロリズムをめぐって議会で激論が戦わされ、最終的には「極悪諸法」が制定され、社会主義派や労働組合運動の取り締まりにも適用が拡大され、共和政的自由が脅かされて、後の社会党代議士ルイ・ブルトン Louis BRETON は「極悪諸法」の最初の法案が可決された1893年12月12日の数週間後に禁固2年の有罪判決を受けた。☒72☒

ジョーレスはこの時期のアナーキストによるテロルが横行した時代に、注目すべき2つの論説を書いている。1つはオーギュスト・ヴァイアンが代議院の開会中の議場に爆弾を投げた1893年12月9日からひと月もたっていない12月30日に「ラ・プチット・レピュブリーク」紙に掲載した「アナーキズム  と題する記事であり、もう一つは「ラ・デベッシュ」紙の1894年2月20日号に書いた「アナーキストたち  と題する記事である。前者の記事はアナーキストの思想の特徴を詳しく分析する。アナーキズムの「原理とは人間個人はそのものとしてひたすら絶対的価値を有する。個人の外界の法は専制的であり、抑制であり、悪である。それゆえに社会的結果として人間個人の権利は完全な自由であり、完璧な抑えられない生命であり、個人の無限に多様な現実を紋切り型の人間性に置き換える抽象的徳性が思いつきでつけ足される個人の欲望を含むあらゆる欲望の完全な充足である」。 「しかしアナーキズムの前に困難が生じる。すなわち各人間個人が単に自分のために、あるいはすべての人間個人

のために発展の絶対的自由を要求できるのかという問題である。最初の場合、エゴイズムの最もおそろしい肯定になるし、容赦のない強者の弱者に対する抑圧となる。それはレッセフェールの至上の法則の名の下で私たちの社会で実践されているブルジョアのアナーキーである。この考え方をバクーニンとクロボトキンのようなアナキズムの大理論家は絶対的に拒絶しているが、ルロア - ボーリュエ氏やイヴ・ギヨ氏に残存している」⁷⁴とジョレースは指摘している。しかし社会主義との根本的な相違をアナキズムは経済的発展の法則を忘却し、拒絶するが、一方社会主義は「第一に国際社会主義が望むように現在の経済秩序に苦しむあらゆる人々を結集する必要があるとする。第二に現在の社会は最も野蛮な破壊の方法で闘わなければならない絶対的悪の悪魔の体現ではなく、アナキストの無神論を装った神話が想定するようなサタンのようなものではなく、生得的な致命的悪と同時に新しい社会の様式の諸要素を含む移行形態である」とジョレースは言う。もう一つの記事「アナキストたち」ではさらにアナキストに手厳しく、アナキストによるテロリズムをファナティックな殺人にすぎず、社会主義に反対する宣伝に使われ、かえって労働者の解放を遅らせると非難した。

また彼のアナキズム批判は新聞の論説にとどまらず、議会でも雄弁家の本領を発揮した。『演説集』で「アナキストのプロパガンダと反動」と題された議会演説を1894年4月30日に行っている。この有名な演説の中で彼はアナキストが密かにカトリック教会と財界、そして内務省・警察と結びついていることを暴露してセンセーションを巻き起こした。

演説の中でジョレースは「社会的上流階級とカトリック聖職者は共和政を右傾化に動くようにアナキストのテロ行為 attentats が生み出す感情を利用しようと試みています。アナキーの恐怖はカトリック派加担政策から援助を受けていて、共和主義精神の敵はあらゆる糾弾と当てこすりによって百年来共和政の前衛である社会主義派を国民の前で窮地に追いやる

うとし、極左からトレビアン、トレビアンの声、共和派全体を容易く打ち負かそうとしています。全議席から拍手。私が政府を非難するのはアナキーに関する政府の声明と捜査においてこの戦術を喜んで加担しているからであります」と発言して政府を非難した。

ジョレースはアナキストと財界・カトリック教会などとの仲介者として知られるトゥルナドル TOUENADRE が語った話がこの日のいくつかの新聞に掲載されていることを指摘したうえで、この人物が話を聞いてほしいと彼のもとに訪れたが、追い返したことがあったとジョレースは告白した。このトゥルナドルは15か月前にカルモアの鉱山労働者のストライキが行われていた最中にストライキ中の鉱山労働者を訪れて、3日間滞在してダイナマイトの爆弾を使用することを勧めた。用心深い労働者はトゥルナドル自身で実行したらよいとかわしたが、自分はアナキスト活動家として知られているので疑惑が自分に降りかかるので実行できないから、その準備を手伝うとして逃亡資金の札束を見せた。労働者が金の出どころについて聞くと、秘密資金ではなくバリの資本家から出たと答えたという。カルモアから追い払われたトゥルナドルは慌てて列車に乗ってトランクをホテルに置き忘れていった。ヴァイアンの事件が起きるまでトランクは開けられることはなかったが、開けられたトランクの中にはユゼス大公夫人 duchesse d'Uzès、シャンペンのヴーヴ・クリコ社の所有者とロートシルド ROTHSCHILD、ロスチャイルドからの手紙が発見されたという。

ジョレースはまたロートシルドから金銭の授受を受けていたとされたシャルル・マラト Charles MALATO の回想録『コミュンからアナキーへ』の一文を読み上げ、1894年3月4日と5日の「ル・タン」紙に掲載された内務省刑務局捜査官ピュイバロー PUYBARAUD のインタビュー記事を示して、元ジェズイットのアナキストの頭目セバスチャン・フォールの取り巻きには多くの元ジェズイット神学校生徒と教会関係者がいると指摘した。

アナキズムについての長大なもう一つの演説「アナキズムと汚職

⁷⁵ 題名はこれも『演説集』による⁷⁵は1894年7月28日に可決された第3の「極悪諸法」の法案に対する修正案を提出した際の演説であるが、パナマ事件を嚆矢とする政界と財界の構造的結びつき
 ジョレースはこれを「政治-財政レジーム régime politico-⁷⁶ancier」と呼んだ⁷⁶による汚職の構造は民主主義を否定し、国民と人命を軽んじる点でアナキストと同様であり、政治不信が爆弾テロルの背景にあると同時に、両者は補完しあう関係にあると指摘した。

ジョレースは「極悪諸法」が社会主義運動に適用された事件として名高い「シャンパール事件」の1893年11月5日のセース県重罪裁判所の公判でも、週刊誌「ル・シャンパール」大騒ぎ⁷⁷第42号、1894年9月20日刊⁷⁷に掲載した「カジミールを倒せ⁷⁷と題する記事で起訴された友人で独立社会主義派ジャーナリストのジェロー-リシャール GÉRAULT-RICHARD を口頭弁論の席になって弁護した。

ジェロー-リシャールはなぜカジミールが民衆を憎み嫌い、なぜ国民から不人気であったを説明する短い記事を書いたのであるが、ジョレースはフランス革命の先駆者であった曾祖父のクロード・ペリエと祖父の七月王朝の首相で実業家であったカジミール・ペリエがいかに富を蓄えたかを詳細にたどって、これらの富が資本家の貪欲と労働者の犠牲の上に蓄えられたことを歴史学者としての鋭い視点で分析し、ジェロー-リシャールの叙述が正しかったことを証明する。⁷⁷ 裁判の結果は被告に1年の禁固刑と3,000フランの罰金が宣告された。

第4節 レオン・ブルジョア内閣の成立と元老院の抵抗

第3次アレクサンドル・リボ内閣は本論文の第2章で詳述したように、アルビ硝子工場のストライキの問題の問題をめぐってジョレースが10月25日に行った首相への責任追及の演説を皮切りに、社会主義派議員たちが連続して行った演説で追いつめられ、最終的には南部鉄道会社汚職の報告書を

公表するのを拒否した後で1895年10月28日に倒れたというジョレースに因縁の深い首相であり、カルヴィニャックをカルモー市長から追放した事件にも深く関わっていた。未だアルビ硝子工場でのストライキが勃発する前ではあったが、ジョレースは6月29日にリボ内閣の内政と外交、特に地方遊説の際にボルドーで行った社会主義運動を批判する演説を取り上げてかなり長い政府質問を行っている。この演説は『ジョレース著作集   の編集者から「いかなる政策  と題された。

1895年11月1日に閣僚全員が急進派であり、その内8人がフリーメーソンに加入していたレオン・ブルジョア少数派内閣が発足するが、累進課税の所得税法や労働者退職年金法などの労働者保護の諸制度、労働仲裁制度など急進派のプログラムは内閣に敵対する元老院の抵抗にあって内閣は1896年4月23日に倒れた。

このブルジョア内閣が発足した直後にジョレースがこの内閣を論評した「内閣の所信表明  「ラ・デベッシュ」紙1895年11月6日  と題された記事では、急進派の大臣だけによって構成されたこの内閣を、究極の目的は違っていると前置きしながらも支持している。ブルジョアは社会主義者ではないが、これまでのオボルチュニスト＝穏健共和派政権とは全く違っているというのである。ジョレースのタルン県での政治活動について述べた第1章でもすでに述べたように急進的共和政を支持する県知事が任命され、社会主義・労働運動を強圧的に封じ込めようとした前知事は更迭された。そして代議院では社会主義派議員グループは累進所得税法を提案し、この内閣に対して「我々は3つの事柄だけを期待する。全市民が有する権利である政府と司法の公正さと、理性によってのみ我々の理想を実現することを可能とさせてくれるプロパガンダと議論の自由と、最後に所信表明で約束された諸改革の厳守である。所信表明は病んだ間違った社会状態を直すことが出来なくとも、平和的な変革を容易にしてくれる」²⁷⁸とこの記事で述べている。

しかし1896年2月11日に元老院はリボ内閣を失脚させた南部鉄道の調査の公表をめぐる問題で、ブルジョア内閣を倒そうと画策する。この後に代議院と元老院の間で対立が起き、消耗戦が長引くと少数派内閣は弱体化していった。この内閣の援護に立ったジョレースは逆風に立たされる。4月23日に退陣するこの内閣の末期の4月10日には、「ル・マタン」紙に寄稿した「岐路 ~~XXXXXXXXXXXX~~」と題された記事では第3共和政憲法に運命づけられた元老院と代議院の対立について、ジョレースは「元老院は譲歩するか私はそう思わない。元老院はあまりに深入りしすぎていて、たとい後ずさりしたとしても国民は単に見せかけだとしか思わない。ともかくも元老院は政府と代議院から出されたあらゆる法案に対して反撃するであろう。機構はもはや機能しなくなっている」⁷⁹と予測し、ブルジョア内閣退陣の後日である5月25日に「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に掲載した記事「共和政の勝利 ~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~」では、ジョレースは社会主義派と急進派左派のかなりの議員は内閣が元老院にもっと決然とした闘いを挑むべきであると考えているとして「権力の座にある人々は辞職した大臣たちがあらゆる共和主義者たちの抗議を巻き起こすことが出来ないと思ひこむ不思議な過ちに陥りがちである」⁸⁰と指摘している。第3共和政下における元老院の問題は第2次レオン・ブルム内閣において再び持ち上がるであろう。

後日談となるが、ブルジョア内閣が倒れた後の1896年6月30日の「ル・マタン」紙に「急進派の政策 ~~XXXXXXXXXXXX~~」と題するきわめて興味深い記事を書いているのでこの節の最後で引用しておきたい。この記事で急進派の政治家を3つの類型に分類する。第1の類型は社会主義に反対するためにはオボルチュニストや反動派とも手を組む政治家であり、第2がランクや政権を離れた後のブルジョアのように、ジョレースが「集中化の政策 politique de concentration」と呼ぶ政策を実行する政治家で、君主政派や「加担派」にも社会主義派とも手を組まず、純粹に改良主義的共和派のみを結集することを構想する。ジョレースはこれは実行不可能な政策で、カトリック教会と社会主義の両者から等距離でいることは不可能であると

指摘する。これ以外の政治家として社会主義派と手を組むことを辞さないクレマンソーとドゥメール DOUMER とゴブレ GOBLET の3人の政治家に代表される政治家であるとジョレースは言う。クレマンソーは第1次内閣で労働者のストライキを激しく弾圧する政治家となり、第2次内閣ではジャコバンの愛国主義者として強圧的措置で和平派と反戦派を弾圧して第1次世界大戦でフランスを勝利に導いた。ドゥメールは1931年5月13日に共和国大統領に選ばれたが、翌年5月6日暗殺された。ブルジョア内閣の財務大臣であった彼は、次のオボルチュニスト政権メリーヌ内閣によって1897年から1902年までフランス領インドシナ提督の職務に任命されてジョレースを失望させた。最後まで一貫してジョレースの信頼を受け続けた急進社会党左派の政治家は、ブルジョア内閣の財務大臣であり、かつてブーランジェ將軍を陸軍大臣とした内閣の首相であったゴブレであった。⁸¹

しかし生涯においてジョレースが最も深い結びつきを持つことになる急進党の政治家は、ブルジョア内閣で公教育大臣を務めていたエミール・コンプであった。おそらくこの頃ジョレースの視界に全く入っていなかった政治家であろう。慧眼な政治家であっても政治的未来の予測はおそらく不可能なのである。

第5節 ジュール・メリーヌの長期政権と農業問題

急進派ブルジョア内閣が退陣したのを受けてオボルチュニスト＝穏健共和派政権が復活して、ジュール・メリーヌが首相に任命される。この内閣は26か月続く長期政権となる。急進派と絶縁して反教権主義を拒み、カトリック勢力の「加担」を暗黙に受け入れ、世俗化政策を遅延させて、修道会の復活に目を閉ざし、直接税の改革を強行せずに農業と富裕層の利益の擁護者となって、政権の基盤を安定化させたからである。ドレーフス事件の表面化に立ちはだかつて「ドレーフス事件なるものは存在しない」と公言した。

この政権発足の直後に「ル・マタン」紙4月30日号に書いた「無駄な戦術 ~~XXXXXXXXXX~~」と題する記事で「メリーヌ氏の仲間は彼の内閣が和解の内閣であると皆に説得しようと涙ぐましい努力をしている」⁸²。「すでにメリーヌの新聞さえ少数派になれば退陣すると伝えている」⁸³とジョレースは述べて、強力な安定政権でないと評価していたし、同じ「ル・マタン」紙の5月12日の記事「キリスト教徒 ~~XXXXXXXXXX~~」でもカトリック派は「反動的であるが意気地のないメリーヌ内閣からほとんど何も受け取れないであろう」⁸⁴私はそれを公言する⁸⁵。「メリーヌ政権があと数週間生き延びたからと言って、我々にとって何であろう⁸⁶」とさえ過小評価して、政権運営に慎重なメリーヌ内閣の巧妙さを侮っていたかのようにであった。同紙に載った「解散後 ~~XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX~~」⁸⁶8月22日⁸⁷と題された記事では6月半ばに代議院解散が議員たちの間で議論に上ったが、10月5日から9日までのロシア皇帝ニコライ2世のパリ訪問と返礼としての翌年8月18日から31日までのフランス大統領フェリックス・フォールのロシア訪問によってオボルチュニスト＝穏健共和派政権の威信は高められ、メリーヌ内閣は1898年総選挙後まで生き延びた。

その間にメリーヌ首相の急進派の将来を嘱望された指導者ポール・ドゥメールの懐柔と取り込みに成功し、ジョレースに衝撃を与える。

1896年12月31日の「ラ・プティット・レピュブリーク」紙の「低劣な策略 ~~XXXXXXXXXX~~」と題する記事でこの事件について次のように伝えている。

「より一層重大なことはインドシナ提督職の受けいれを選挙民に手紙で伝えたことである。彼は選挙民にそしてフランスに、『彼の友人たちと党首』に相談した後で受け入れたと知らせたのである。何を言っているのか⁸⁷そして闘いの持ち場を放棄することをドゥメールに勧めた急進派の党首とは誰なのか⁸⁷しばらく前からドゥメール氏のはっきりとした揺るぎない態度は穏健急進派を困らせていたと⁸⁷されていた」。

ともかくもドゥメールの総督職の受諾はクレマンソーのフェリーのトンキン政策への非難以来の急進派の政策の転換をもたらし、急進派は植民政策に協力することになった。

年が明けた1897年1月27日に「ラ・デペッシュ」紙に書いた記事「無益な試み ~~XXXXXXXXXX~~」では「メリーヌ内閣について今では事情に通じており、それゆえに資本という大きな利益と特権の擁護のためには権力集中が、オボルチュニズムと右翼の融合と言って良いものがもとめられていることを知っていた。そしてこれによって議会での堅固さとメリーヌ内閣の持続性が作られた。内閣は長生きして、攻撃を良くしのぐであろう。なぜならば内閣は留保なしに右翼の支持を得たからだ⁸⁸」と評し、同年7月18日の「ラ・ランテルヌ ~~XXXXXXXXXX~~」紙に載った「退潮 ~~XXXXXXXXXX~~」と題する記事には「なによりも民主政治が危険の広がり幻想を抱かないことと、民主政治が厳しい戦いにむけて全精力を備えることが重要である。オオボルチュニズムと右翼が連携したメリーヌ内閣がおそらくは選挙まで持続して、普通選挙をないがしろにするからである。数日前からこの公然とした大胆な反動的内閣が来年の5月まで倒れることはないのではないかと自問するようになったことを正直に告白する⁸⁹」と言い切っている。

この節の最後に付け加えておかなければならないのは、1897年の6月と7月にさらには11月と12月にジョレースが農業問題をめぐって代議院でメリーヌ首相と激しい論争を行ったと同時に、新聞でもメリーヌの農政を批判する記事を多数執筆したことである。メリーヌが農業利益の擁護者として農民層の支持を集め、彼の名が冠される関税法~~XXXXXX~~メリーヌ関税法~~XXXXXX~~の提案者として知られる。ジョレースの立場はメリーヌが味方とする大農経営者ではなく小規模小作農を擁護するために農作業の障害となっていた兵役の短縮と土地税の全廃を含む税制改革と農家の借財の抵当権を政府が抵当権者として引き受けること、大規模農耕機械を市町村が購入して耕作者に貸与することなどを政府に求めた。ヨーロッパ全体の恐慌 *dépression* が

終わりかけようとしていた1897年11月20日の代議院での演説⁹⁰では表面的な行政的統計ではなく農業の全般的改革のための耕作者の実態を調査するアンケートを行うことをもとめ、同年12月20日の演説では零細養豚業者を豚肉価格暴落の危機から救済するためのメリーヌ首相の自家菜籠中の保護貿易政策は農業危機をかえって悪化させていると批判して、かつてのアメリカからの塩漬け肉の禁輸のような政策はとるべきではなく、マッキンレー大統領のように相互的関税引き下げ政策を追求するべきだと主張している。⁹¹

結びに代えて

総選挙が5月に予定されていた1898年の1月13日にはこれまで大事件になることを必死で押さえてきたドレーフュス事件がエミール・ゾラのフェリックス・フォール大統領に宛てた公開書簡「私は弾劾する⁹²」の公表によって一挙に政局の中心に躍り出て、メリーヌ内閣による防御の壁は崩れ去る。すでにジョレースは彼の出身校の高騰師範学校の司書で友人である社会主義者リュシアン・エル Lucien HERR からドレーフュスが無罪であることを説得されていたが、この書簡の公開までドレーフュス事件に介入することを控えていた。1898年1月11日のエステラジー無罪放免と、13日のゾラの公開書簡「私は弾劾する⁹²」公表とジョルジュ・ピカル Georges PICQART⁹²逮捕からしばらく時間を経た1月22日ようやくジョレースは沈黙を破って代議院で発言する。この日、代議院でジョレースはドレーフュス裁判とゾラ訴追などの問題点を追及すると、ナショナリスト⁹³国粋主義者⁹⁴の議員ベルニス BERNIS が猛然と発言を妨害し、乱会になった。その後で、ベルニスは演壇の下に駆け寄りジョレースに暴行を働いた。議会の廊下でも乱闘は続いた。

1898年5月8日 - 22日に総選挙が行われ、ジョレースはタルン県アルビ第2選挙区で対立候補ジェローム・リュドヴィック・ドゥ・ソラージュ

Jérôme Ludovic de SOLAGES に敗れて議席を失う。⁹³ 彼がドレーフス事件に1898年1月以来深いかかわりを持つようになったことを、多くの識者は労働者硝子工場のアルビ移転とともに選挙の最大の敗因として挙げる。

上述の代議院での1月22日の政府質問以降、選挙運動に忙殺されたジョレースは同年7月7日の代議院でのブリソン内閣陸軍大臣によるドレーフス有罪を確証する3つの決定的証拠の発表に対して「ラ・プティット・レピュブリーク」紙に連載された反論記事の掲載まで一時期ドレーフス事件への関与を休止する。

ジョレースが落選した1898年5月の総選挙の結果は、数の上で見ればメリーヌ政権は過半数を維持したかに見えた。事実選挙直後に開かれた代議院での6月14日の信任投票ではメリーヌは23票の多数で信任された。⁹⁴ しかし共和派だけの与党をとするという付帯決議が急進派から出され可決されて、信任されたメリーヌは12票だけの多数の与党では今後の議会運営は不可能と考えてフェリックス・フォール大統領宛に辞表を提出した。⁹⁵

1898年総選挙でジョレースは1892年の議員辞職以降に政界の復帰に執着したカルモー鉱山の経営者ソラージュ侯爵の妨害活動で、選挙運動の自由も奪われた状態に陥った。そして社会主義派議員として保守的農村部の社会に地歩を築くことがいかに難しかったかは上記の第1章と第2章で詳述したタルン県での社会主義運動と労働組合運動へのジョレースの取り組みからも明らかである。周囲からの勧めにもかかわらずジョレースはカルモーの選挙区を放棄することはなかった。そして1902年には⁹⁶土重来を果たす。それも与党エミール・コンブ内閣の中枢を構成する人物として政界に復帰する。

1898年5月総選挙までの彼のドレーフス事件との出会いの過程と、落選後に1898年7月7日のゴッドフロア・カヴェイニャック演説に対する「ラ・プティット・レピュブリーク」紙上での反論を起点にドレーフス再審派の旗手として躍り出るまでの時期が、1898年総選挙での落選という事件に間に挟んでいるために、1898年総選挙でジョレースが闘った選挙戦の詳細

は、この時期のジョレースのドレーフス事件への介入の過程と併せて叙述することが避けがたかったために、ドレーフス事件とジョレースとのかわりあい为主要な対象とする次稿「1898年5月総選挙での落選から1902年5月総選挙で当選するまでの時期のジャン・ジョレースの政治活動」『國學院法學』第57巻、第4号に譲らざるを得なかった。

1902年の政界復帰までのジョレースは活動の舞台をジャーナリストと著述家へと移すのであるが、この1893年から1898年までのタルン県とカルモー市を中心とした白兵戦のような命がけの経験は、消し去りがたい記憶を彼の脳裏に刻んだであろうことは想像に難くない。この後第3共和政前半期の第1次世界大戦に向かって進むフランス社会にあってジョレースは社会主義運動が与党の中核を占めるよりも、社会主義運動を統一して野党反対派として反戦平和運動の推進力となる進路を選択するのである。

注

フランスでは1884年4月5日法la loi du 5 avril 1884制定以来、パリ・コミューン以後1977年まで市長が存在しなかったパリ市をのぞき、市長は市議会議員によって互選される。一方県知事は共和暦Ⅲ年ブリュヴィオズ28日法loi du 28 pluviôse an VIII以降政府によって任命される。

元ガンベッタの腹心でカジミール・ペリエCASIMIR-PERIER内閣の公教育大臣であったウジェーヌ・スピュレルEugène SPULLERは1894年3月3日の代議院での演説で宗教的寛容を容認する「新精神」を称揚し、政教分離を主張したガンベッタの「ベルヴィル綱領」1869年を放棄した。

1887年に「ラ・デベッシュ・ドゥ・トゥールーズ」の定期寄稿者になって以来、ジョレースはジャーナリストとしての活動に多くの精力を傾注して多数の記事を発表した。彼が多くの記事を書いた3つの新聞では、「リュマニテ」紙に2671点が最多で、次いで「ラ・デベッシュ」紙が887点、「ラ・プティット・レピュブリーク」紙が642点に及ぶが、その他の新聞にも多くの記事を執筆していることも忘れてはならない。

ome.4Paris. Fayard.

2017, p.45, note 2

- ☒☒☒1889年総選挙でジョレースが落選したと同じこのカストル第Ⅰ選挙区から立候補した社会主義者レオン・カラゲルは県南部のラブリュグイエール Labruguière の洋服仕立て職人で、この総選挙第1回投票で4,841票を得て共和派候補第1位となって第2回投票に残ったが、第2回投票で7,289票対8,727票で王政支持者レオン・アブリアル Léon ABRIAL に敗れた。☒☒☒☒32, note 1. ジョレースはアブリアル死後の補欠選挙でも立候補したカラゲルを応援して1894年3月3日に応援演説をおこなっている。《Discours de Castres en soutien à Léon Caraguel》☒☒☒☒p.50-52
- ☒☒☒この1893年8月2日の応援演説は翌々日の同年8月4日号「ラ・デベッシュ」紙に掲載されたが、この応援演説でかつて王政派とカトリック教権派と闘い、世俗教育法や労働組合法を実現した穏健共和派は、いまやパナマ事件を解明できないで終わりの時を迎えている。社会主義共和派のみが反動と闘うことができるとして、この頃のジョレースは共和派内の最左派として社会主義を描いている。《Discours de Castres en soutien à Léon Caraguel》☒☒☒☒p.32-37
- ☒☒☒《Discours de Mazamet en soutien à Jean-Baptiste Calvignac》☒☒☒☒p.37-41
- ☒☒☒1892年のカルモア鉱山のストライキ後に代議院議員を辞職したリユドヴィック・ドゥ・ソラージュ侯爵の議席を補充する1893年1月の補欠選挙でジョレースが社会主義派の議員として初当選した。しかし今度は1898年総選挙でジョレースを破ってソラージュ侯爵は議席を奪回するが、彼の義父ルネ・レイユ男爵 Baron René REILLE は陸軍元帥を父に持つサン・シール陸軍士官学校 Saint-Cyr 卒業のエリートの軍人で、ナポレオン3世のイタリア戦争に従軍している。彼について特筆すべきはナポレオン1世時代のマッセナ元帥を祖父に持っていて、妻はスールト元帥の孫である。そして彼の政治的立場は帝政派☒ボナバルティスト☒である。
- ☒☒☒急進派は1890年代に都市部の労働者の支持を社会主義派によって奪われながらも、南部を中心とする農村部に支持基盤を移して党組織の建設に努め、1901年6月21日 - 23日にパリで155のフリーメーソンのロッジと215の新聞、476の委員会、201人の代議院議員と78人の元老院議員を含む1,100人以上の議員を結集して「急進共和 - 急進社会党 parti républicain radical et radical-socialiste」という党名で急進派の政党が結成された。社会主義派は1899年のジャッピー大会から3度にわたる統一した社会党の結成の試みは「ミルラン入閣問題」のために失敗して1902年に右派と左派の2つの「フランス社会党」が結党されるが、統一した社会党が結成されるのは第2インターナショナル・アムステルダム大会での「統一決議」に従って開催された1905年のパリでの「グローブ大会」においてであり、この時点まで

député.☒5月1日の示威運動。ウジェース・ボーディアに対する訴追要請☒1893年5月20日☒ 7. Les élections. Les fonctionnaires candidats.☒選挙。公務員候補☒1893年5月29日☒ 8. Le socialiste et démocratie rurale. Discussion d'un amendement au budget portant suppressin de l'impôt foncier sur la propriété non bâtie.☒社会主義者と農村民主政治。家付き地所への土地税廃止についての修正予算案の審議☒1893年6月15日、7月8日・10日☒ 9. République et Socialisme. Réponse à la déclaration du cabinet Charle Dupuy☒共和政と社会主義。シャルル・デュピュイ内閣の宣言に対する返答☒1893年11月21日☒10. Atteinte au su☒age universel. L'élection de M. De Berne-Lagarde à Albi☒普通選挙制に対する侵害。アルビでのドウ・ベルス・ラガルド氏の当選☒1893年12月7日☒ 11. Pour la démocratie rural. Dégrevement du principal de l'impôt foncier sur la propriété non bâtie par le produit de la conversion.☒農村民主政治を支持して。利子率転換の税収による家付き地所への土地税本税の減税☒1894年1月16日・20日☒ 12. Socialisme agraire. Monopole de l'importaion des blés.☒農業社会主義。小麦輸入の独占☒1894年2月17日・20日☒ 13. La propagande anarchiste et la réation.☒無政府主義者のプロパガンダと反動☒1894年3月8日・4月30日☒ 14. Corruption életrale. L'élection de M.Edomond Blanc.☒買収選挙。エドモンド・ブラン氏の当選☒1894年3月17日☒ 15. Les coopératives et les patente.☒生活協同組合と営業税☒1894年5月7日☒ 16. La République et l'Université. Les libertés du personnel enseignant.☒共和政と大学。教員スタッフの諸自由☒1894年6月21日☒ 17. Les grèves de Graissessac.☒グレースサックのストライキ☒1894年7月7日☒ 18. Réformes fiscales. Le remplacement des quatre contributions par l'impôt général et progressif sur les revenues.☒税制改革。4直接税の累進総合所得税への置き換え☒1894年7月10日・12日☒ 19. Dégrevement en faveur des petits contribuables.☒少額納税者優遇減税☒1894年7月13日☒ 20. Répression des menées anarchistes. Provocations adressée aux militaires.☒無政府主義者の陰謀。軍隊に対する挑発☒1894年7月24日☒ 21. Anarchiste et corruption.☒無政府主義者と汚職☒1894年7月25日☒ 22. Socialisme et paysans. La créaion des sociétés de crédit agricole☒社会主義と農民。農業信用組合会社の創設☒1894年10月27日☒ 23. Dilapidation des fonds publics. Les voitures de M. Favette☒公金横領。ファヴェット氏の自動車☒1894年10月29日☒ 24. Député soldat. Le cas de M. Mirman.☒兵士代議士。ミルマン氏の場合☒1894年10月30日☒ 25. Le budget de 1895. L'oeuvre des classes dirigeantes.☒1895年度予算。支配階級の成果☒1894年

12月1日 26. Imprimerie nationale. 国立印刷局 1894年12月17日 27. Les scandales des chemins de fer du Sud. La nouvelle convention. 南部鉄道スキャンダル。新協約 1894年12月22日 28. Code de justice militaire. Suppression de la peine de mort. 軍事裁判法典。死刑の廃止 1894年12月24日 以上の演説の論題は編集者エドモン・クラリスによる。

最後の軍事裁判法典についての彼の演説はドレーフス事件と関連付けられてあまりにも有名であり、多くの場合ジョレースの発言の一部を取り出して、「バゼーン BAZAINE 元帥は国家反逆罪が立証され死刑が宣告されたのに、銃殺刑に処せられませんでした。ドレーフスは全員一致の判決で国家反逆罪が立証されたのに、死刑の判決が下されませんでした。これらの判決が出されたのにたいし、国民は単なる一兵卒が一分間隊伍を離れたとして、暴力をふるったとして、情けも容赦もなく銃殺刑に処せられたのを知っています」 2320. JAURÈS, Jean; 2320 とジョレースが発言したとして、一部ではドレーフスの死刑をもとめたかのように理解されている。しかし軍法上の不平等な扱いによって一兵卒が死刑に処せられてきたことに反対しているのであって、ドレーフスの死刑をもとめたのではない。1894年当時のジョレースはドレーフス事件が罪事件であることを知る由はなかった。

20 « Dans le Tarn », 13 mai 1895. tome.4, p.64-68

21 « À l'audience », 2 mai 1895. p.68-72

22 « Réponse », 5 juin 1895. p.74-78

23 « Dépêche de Jaurès », 4 août 1895. p.79-80

24 « Télégramme daté du 7 août au Président du conseil », p. 80-81

25 « La grève de Carmaux », 81 reproduit par 5 août 1895, p.2

26 « À Narbonne », 26 août 1895. p. 80-81

27 « Le grand meeting de Tivoli pour les armés de Carmaux. Discours de Jaurès. » p. 90-95

28 « Discours de Toulouse », p. 95-99

29 « Grève des verriers de Carmaux. Discours à la Chambre. » séances des 24 et 25 octobre 1895. p. 99-158

30 p.119

31 p.158-159 note 1

- 90) p.2524-2525.
 « Discours à la Chambre sur la crise agricole », tome.6,
 vol.I, Paris. Fayard. 2001 pp.36-40.
- 91) p.2524-2525.
 « Discours à la Chambre sur la mévente du porc », tome.6,
 vol. I, p.45-57
- 92) ピカル、ジョルジュ、PICQUART, Georges 1854年 - 1914年 1895年7月1日
 に陸軍参謀本部情報部長 対外的には「統計局局长」になり、ドレーフス有
 罪の確証を固めるために陸軍省が所蔵する証拠書類を調べていると、意外にも真
 犯人がエステラジーであることを示す証拠を発見。参謀本部総長と次長に報告す
 るが、逆に彼はチュニジアの危険な地に左遷され、死を覚悟したかれはルプロワ
 弁護士にエステラジーが真犯人であるとの証拠を預けた。後に機密漏洩の咎を受
 け懲戒免職された。ドレーフスの刑宣告解除と同時に彼は准将として復職し、
 第1次クレマンソー内閣の陸軍大臣となる。最期は落馬という不慮の事故でこの
 世を去った。彼の葬儀は国葬とされた。PIERRARD, Pierre; Paris. Larousse. 1968. p.195
- 93) 1898年総選挙でジョレースが社会主義派議員になってただ1回のみ経験した落選と
 いう出来事については拙稿「1898年総選挙とジャン・ジョレース：タルン県アル
 ビ第2区の選挙結果と社会主義派代議士ジョレースの落選」『國學院法學』第51巻、
 第4号、2014年3月を見よ。
- 94) Chambre des Députés. Débats parlementaires.
 p.1792
- 95) メリーヌ内閣が倒れて、ブリソン内閣が組閣される過程については大統領府官房
 長官ルイ・ルガル Louis LE GALL の回想録をまとめた RAIBANT, Charles; Paris. Hachette. 1963. pp.134-156を参照した。ただしルガルは王
 政支持の保守主義者であり、そのイデオロギーの視点からの評価であることを念
 頭に置く必要がある。

令和元年度 大学院短期招聘研究員の研究報告

令和元年度國學院大學大学院国際学術交流事業による短期招聘研究員の招聘に伴う研究活動について、下記のとおりご報告いたします。

招 聘 者：法学研究科 教授 高橋信行

招聘研究員：ニーム大学 特別研究員 Teles Da Silva Dhiego

招 聘 期 間：令和元年10月15日（火）～令和元年11月16日（土）

学術交流報告（講演会等）①

実施日時：10月24日 16時10分～17時40分

実施場所：1302教室

タイトル：フランス社会の現在①—警察留置（garde à vue）について

参加対象：一般

概 要：フランスでは、イスラム過激派のテロ活動に起因して、警察留置（警察機関による犯罪の嫌疑がある者の一時的拘束）が多用されている。本講演会では、警察留置の仕組みについて説明した上で、近年の問題点について解説した。

学術交流報告（講演会等）②

実施日時：10月28日 12時50分～14時20分

実施場所：1308教室

タイトル：フランス社会の現在②—フランスの大学制度と学生生活について

参加対象：一般

概 要：フランスの高等教育制度（大学やグラン・ゼコール）は日本のそれとは大きく異なっており、両国の制度を比較することで、それぞれの長所・短所が浮き彫りになると考えられる。本講演会では、フランスの大

学制度や学生生活について説明した上で、高等教育のあるべき姿について参加者との質疑応答を実施した。

学術交流報告（講演会等）③

実施日時：11月11日 14時30分～16時00分

実施場所：1308教室

タイトル：フランス社会の現在③—マクロン大統領と「黄色いベスト」運動について

参加対象：一般

概要：マクロン大統領の就任に象徴されるように、フランス政治は大きな変革期を迎えている。しかし、マクロンの提唱する改革は痛みを伴うものでもあるために、激しい抗議活動も続いている。本講演会では、フランス政治の現況を説明した上で、いわゆる「黄色いベスト」運動の原因と結果について解説した。